

岐 阜 大 学

日本語・日本文化教育センター紀要

2022

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要

2022

巻頭言	橋 本 慎 吾	1
-----	---------	---

特別寄稿

日本語・日本文化教育センター雑感	森 田 晃 一	3
------------------	---------	---

論 文

地元ネタ芝居

―「松野殺し」と「大垣五人斬り」―	土 谷 桃 子	7
日本語教育分野における「キャリア」に関する研究の動向 ―2004年から2022年までの文献調査から―	松 尾 憲 暁・山 本 晋 也・高 井 かおり	23

年 報（2022年4月～2023年3月）

1. 日本語研修コース	33
2. 日本語・日本文化研修コース	46
3. 日本社会文化プログラム	48
4. 全学共通教育	50
5. 年間行事	51
6. 交流ラウンジ	58

資 料

岐阜大学留学生数	60
----------	----

巻頭言

日本語・日本文化教育センター長 橋 本 慎 吾

紀要本号は日本語・日本文化教育センターの2022年度活動報告を行なっています。この巻頭言を書いている2023年には日本政府が水際対策を撤廃し、留学生を含め外国人の入国が自由になり、コロナ禍前とまではまだ行きませんが、留学生数も増加し、日本語授業を受ける学生も増えてきました。本号が報告するのはこの1年度前の2022年度で、コロナ禍がまだまだ収まらない状況での活動でした。入国できない留学生に対するオンラインでの日本語授業も行われました。6月頃からほぼ全員が入国を果たし、年度後半は入国が遅れる学生もほとんどおらず、オンライン併用授業も少なくなっていました。

コロナ禍に見舞われた2020年度以降、オンラインで会議や学会が開催されるようになり、こちらはコロナ禍の収まりを見せる昨今でも継続されているようですが、オンラインによる日本語授業は、コロナ禍の収まりとともに（少なくとも本学では）行なわれなくなってきました。状況が許されるなら、語学教育は対面で実施したいということなののでしょうか。本号の報告は、オンライン併用で実施した教育活動の、最後の報告となるのかもしれませんが。

2022年度は大きな節目となりました。森田晃一教授が定年退職を迎えられました。森田先生は20年に渡り本センターで研究、教育に尽力され、2016年から4年間センター長を務められ、留学生センターから日本語・日本文化教育センターへの組織変更、旧センター建物から現在の地域科学部・共通教育棟4階への移転など、多くの変革を実行されました。先生が本学を離れられることは寂しい限りですが、定年退職を恙無く迎えられたことは慶ばしいことです。これからの益々のご活躍とご健勝を祈念し、これまでのご尽力に対し心より御礼を申し上げます。

本号では森田先生に特別寄稿をお願いし、日本語・日本文化教育センターでのご活躍を振り返っていただきました。ありがとうございます。

本号には、研究論文2編を掲載しています。コロナ禍の中まとめられた研究成果です。ありがとうございます。

特別寄稿

日本語・日本文化教育センター雑感

森 田 晃 一

日本語・日本文化教育センター雑感

森 田 晃 一

1. 備忘として

2003年4月1日留学生センター（以下、センターと呼ぶ）に教授として採用され、2023年3月31日定年退職を迎えるまで20年間にわたり、計画的に整備された美しい岐阜大学キャンパスで教育・研究に従事するという幸運に与った（本学に勤める前、10年ほど岐阜県内の私立大学に在職していたから、岐阜県での教員生活は30年を数える）。その間、多彩で才能豊かな仲間（日本語・日本文化教育センターや旧留学生課、グローバル推進機構等の教員・事務・講師の仲間）と優秀な学生（外国人留学生〈日本語・日本文化研修留学生や全学共通教育の「日本事情」受講生〉と日本人学生〈全学共通教育の人文科学科目受講生〉）に恵まれ、時には悩みながらも、楽しく充実した教員生活を送ることができた。皆さんに衷心から感謝を捧げたいと思う。

さて、センターは1996年5月の設置なので、今年で28年目を迎えたことになる。一般に、一世代を約30年と捉えるなら、まもなくセンターは次のステージに進んで、さらなる展開が期待される時期ともいえよう。2016～19年度、私はセンター長を務め、センターの将来についてあれこれ構想を練り、そのいくつかを仲間とともに実行に移してきた。次の「2」で取り上げた事案に絞って、その間の事情を備忘として略述し、センターの「明日」への手掛かりのいくばくかを、ここに残しておきたい。

2. センターの移転と組織改編

センターでは初代を除いて、歴代センター長は他部局から迎えていたが、私はたまたま、センターの所属にしてセンター長（第8代、2018年度からは日本語・日本文化教育センター長）に就くこととなった。センターの課題については、当然のことながら熟知していたので、これを機に、設置から20年を経過したセンターのミッション・体制を、情勢に鑑みつつ主体的かつ全面的に見直し、その調整をもってセンターの基盤強化を図り、次なる展開に備えようと考えたのである。

(1) センターの移転

2017年4月1日、センターは地域科学部・全学共通教育棟4Fへの全面移転を実現し、懸案だった教員研究室の集合及び教室・会議室・留学生ラウンジ・資料室の確保等々の事案を解決して、センターの国際教育機能を一か所に統合することができた。

センターは設置以来、旧工業短期大学の建物を本拠とし、そこを改修・増築しながら使用してきたが、至って手狭な空間であったため、地域科学部棟・全学共通教育棟・工学部棟に研究室や教室を借り受け、業務遂行に当たっていた（それでも受講者数によっては不足する場合もあって、急遽教室を探して手当てしたこともあった）。

センターが地域科学部・全学共通教育棟4Fに移転するのを機に、地域科学部・グローバル推進本部（2019年度からはグローバル推進機構）と協働し、国際教育の場を地域科学部・全学共通教育棟4Fと隣接の建物内に統合し、外国人留学生と日本人学生に対する教育を効果的に実施するとともに、近接する図書館1Fのグローバル推進本部事務部門（学術国際部国際企画課）との

連携をより円滑に進めて、国際関係業務を一層充実させることを企図したのである。

これにより、以下に示すような実効を挙げることができたのではなかろうか。

- 1) 教員研究室が集合したことで教員間の意思疎通が容易となり、また外国人留学生と日本人学生に対する国際教育の場が、地域科学部・全学共通教育棟4Fと隣接の建物内に統合したことにともない、より効果的な業務遂行が実現できるようになった。
- 2) 80畳以上の大空間の和室を整備し、学内外の講師による能楽・茶道・和装等々の伝統文化に関する体験講座を実施したことにより、外国人留学生と留学を志す日本人学生に対して、文化理解を深める場と機会を提供することができるようになった。
- 3) 短期派遣（全学部・全研究科に所属する学生対象）の渡航前英語研修講座及びサマースクール・ウィンタースクール（ともに受入）の日本語・日本文化授業、開講式・閉講式等々の各種イベントを実施する教室として、安定的に活用することができるようになった。
- 4) ラウンジチューターの任用、外国人留学生用学習図書収集、パソコン・プリンターの設置、異文化交流に関わる各種イベントの開催等々により、外国人留学生と日本人学生の交流の場と機会を提供することで、外国人留学生に対しては日本語・日本文化学習の支援となり、日本人学生にとっては留学意欲を醸成する空間として機能させることができるようになった。
- 5) 後述する留学生就職促進プログラムの遂行に当たって、「就活個別面談」等に対応する相談室として使用することができるようになった。

(2) グローカル推進本部（のちグローバル推進機構）への編入

理事（国際・広報担当）・副学長と面談を積み重ね、センター教員同意のもとにミッション・体制を整理した上で、センターは、2018年4月1日から日本語・日本文化教育センター（以下、日文センターと呼ぶ）と名称を変更し、2015年度発足のグローバル推進本部（前述のように、2019年度からはグローバル推進機構）内へ編入されることとなった。

2004年4月1日の国立大学法人化を機に、全国の国立大学の留学生センターは、各大学の国際化の実情に合わせて名称・業務等を変化させてきた。私たちも、時代の、また学内外の要請を受けて業務を多様化させながら、実効を上げるべく地道に組織の運営を行ってきたところであった。2018年のセンター改編は、第3期中期目標・中期計画を踏まえ、グローバル推進本部・学術国際部国際企画課等の関係部局と協議し、センター全体を点検・整理して、「時と場」（2018年当時の岐阜大学）に合致した名称・業務への再構築を図ったものであった。この改編については、私がセンター長に就任した2016年度から2年間、ほぼ毎週のように理事（国際・広報担当）・副学長と、センター及びグローバル推進本部の将来について意見を交わし、綿密な検討を重ねた上で実行したものであった。そこでは、教授会を有していたセンターの自立性と学内における地歩が実質的に保全されることが、重要な条件となっていた。

日文センターを編入したグローバル推進本部は、理事（国際・広報担当）・副学長が本部長を務める学長直属の組織で、本学の国際化のため、また地域社会のグローバル化（地域に根ざした国際化と成果の地域還元）に貢献するための施策を行う組織であった。グローバル推進本部では、日文センター長が副本部長となり、日文センター教員が本部内の三部門（国際協働教育推進部門・国際交流推進及び国際交流IR部門・留学基盤教育推進部門）の構成員となって、多様な活動に携わるようになった。

センター組織改編の枢要は、「留学生センター」から「日本語・日本文化教育センター」へと

改称し、日文センターの中核業務が日本語・日本文化の教育と研究であることを明確にした点にある。すなわち、次世代の国際社会を担う優れた人材を育成して本学の国際教育の充実に貢献するため、日文センターはおもに次のような業務を推進することとしたのである。

- 1) 外国人留学生に対する日本語・日本文化教育
- 2) 日本人学生に対する国際理解教育
- 3) 多文化交流機会の提供
- 4) 外国人留学生の受入とその体制整備
- 5) 地域自治体等との連携事業

具体的には、「日本語研修コース」「日本語・日本文化研修コース」「日本社会文化プログラム」「全学共通教育（日本語・日本事情に関する科目）」「全学共通教育（人文科学科目）」「交流ラウンジの運営」「文化関係ワークショップの開催」「特別講演会・留学生センターフォーラム等の開催」「岐阜県・岐阜市・郡上市との連携事業の推進」等々が、それらに該当する。同時に、従来のセンター業務であった「サマースクール（受入・派遣）」はグローバル推進本部の一部門へ、「留学生修学・生活指導」はグローバル推進本部事務局へと、それぞれ移すことにした。

3. 日文センターの「明日」へ

上記「センターの移転」「グローバル推進本部（のちグローバル推進機構）への編入」の内容は、日文センターの次のステージを構想する枠組み（制約？）を成すものである。

以上のほか、グローバル推進本部（グローバル推進機構）では、関係者の皆さんの実直な協力を得ながら、以下の事業に関与することができた。どれも時間に追われながら、また判断に迷いながらの遂行ではあったが、メンバーで議論を重ね、時々的確な助言をもらって、事後には充実感とともに達成感を味わうという喜びが得られた。

- 1) 岐阜地域留学生交流推進協議会主催「岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会」に関して、2016～19年度の4年間、幹事校を受けた本学の業務全体をまとめ、弁論大会の今後を見据えた体制づくりのため、参加校を招集して会議を開催。
- 2) 文部科学省委託事業「留学生就職促進プログラム」（2017年10月～2022年3月）受託に際し発足した「愛岐留学生就職支援コンソーシアム」にて本学の実務を担当し、主幹校である名古屋大学との調整（幹事会・実務委員会・専門委員会）、岐阜県内機関（岐阜県・岐阜県経営者協会・JETRO岐阜・岐阜大学）共同事業実施のための会議の開催、ビジネス日本語教育・キャリア教育・インターンシップの三本柱からなる事業を企画・運営。
- 3) 日本政府による受入・派遣拡大方針のもと、本学の実情を踏まえ、日本人学生・外国人留学生に授与する国際交流に係る奨学金を、2016～19年度の4年をかけて全面的に見直し、各奨学金の特色を整理してその区別を明確化し、選考基準等を改正して合理的かつ効果的な制度へと改善。

これらは、私なりに、将来の日文センター業務展開の可能性を探って関与したものである。現在、日文センター教員・事務のメンバーは、世の中の情勢がますます混沌とする中、新たな構想を練り、その実現のために日々奮闘されているものと推察する。希望の成果が上がらんことを、待望するに切なるものがある。ご健闘を。

論文

地元ネタ芝居

—「松野殺し」と「大垣五人斬り」—……………土 谷 桃 子 7

日本語教育分野における「キャリア」に関する研究の動向

—2004年から2022年までの文献調査から—

……………松 尾 憲 暁・山 本 晋 也・高 井 かおり 23

地元ネタ芝居

—「松野殺し」と「大垣五人斬り」—

Fact-based plays in Gifu :

“A Murder case of *Matsuno*” and “Bloodshed of five people in Ogaki”

土 谷 桃 子

要旨：

明治33年（1900）までの『岐阜日日新聞』に掲載された芝居関係の記事を調べたところ、地元岐阜で起きた事件を芝居化している例が散見された。本稿ではそれらの芝居を「地元ネタ芝居」と呼ぶ。地元ネタ芝居は、身近で起きたセンセーショナルな事件を知りたいという、人々の率直な興味を引いた。本稿では、確認できた20例につき根拠記事を示し、それぞれに説明を加える。さらに、その中から事件の前後や芝居化の様子が詳しく分かる「松野殺し」（明治21年（1888））と「大垣五人斬り」（33年（1900））を取り上げる。

「松野殺し」は、事件直後の芝居化は見送られたが、被疑者の公判が始まると、その連載記事が呼び水となり現岐阜市の国豊座で集中的に上演された。「大垣五人斬り」は、壮士芝居で好んで演じられた。両芝居から、事件報道と芝居化のタイミングや、芝居小屋や上演団体の特色を指摘する。

1. はじめに

岐阜は、芝居を本職としない地元の人々が演じる地芝居（岐阜地域では「地歌舞伎」と称する場合もある¹⁾）が盛んな地域である。筆者はその歴史を明治期の『岐阜日日新聞』記事から探索している。今までに「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」（『岐阜大学留学生センター紀要2014』2015.7）、「岐阜の伊奈波の芝居小屋（2）—末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興—」（『岐阜大学留学生センター紀要2015』2016.7）、「岐阜の地芝居の足跡—『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉猟から—」（『岐阜大学留学生センター紀要2017』2018.7）、「明治の地芝居の一側面—『岐阜日日新聞』郡上関連記事を手掛かりに—」（『岐阜大学日本語・日本文化教育センター紀要2019』2020.08）を表し、科学研究費助成事業（JSPS 科研費25370213「幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態」、2013.4～2016.3）で「岐阜地域芝居興行記録一覧稿（明治初年～）」（2016.3）をまとめた。これらの研究の基盤は、岐阜県図書館と岐阜市立図書館所蔵の一般地方紙『岐阜日日新聞』（明治14年（1881）2月19日創刊、数回の紙名変更を経て現『岐阜新聞』に至る）紙面の悉皆調査で、本稿執筆時には明治33年（1900）まで終了している。芝居に関係があると思われる記事を逐一集積していくなか、当時世間の耳目を集めた男女の恋愛刃傷沙汰等のセンセーショナルな事件が、迅速に芝居化されている例が複数見られることに興味をそそられた。本稿では、これを「地元ネタ芝居」と称する。

身近な事件を題材としたものが人気だったことは、『岐阜県史 通史編 近代下』（1972）にす

で指摘がある (pp.1002~03)。明治15年 (1882) 4月に板垣退助が岐阜で刺された事件については、筆者も「板垣退助岐阜遭難の芝居—明治十五年の作品を中心に—」(『岐阜大学国語国文学』38号、2012.3) で詳述したが、『岐阜県史』ではそれ以外に、明治21年 (1888) 頃人気があった「松野殺し」や、「岐阜侠客水野弥太郎騒動」(19年 (1886) 末)、「お光綱次郎夢の新橋」(24年 (1891) 7月)、「東山紅葉の錦」(21年 (1888) 6月) が挙げられている。また、20年 (1887) 4月21日の『岐阜日日新聞』記事を根拠に、地元の事件を直ちに脚色できる戯作者の存在を指摘している。

本稿では、残忍な事件が迅速に芝居化され、当時の岐阜の人々が、好奇心を抑えられずにその芝居に引き寄せられていたことを、「松野殺し」(明治21年 (1888)) と「大垣五人斬り」(33年 (1900)) の二例から示す。際物芝居として一瞬の盛り上がりを見せた後、二度と舞台に上ることのなかった芝居とその観客の姿を、新聞記事から浮かび上がらせたい。

2. 地元ネタ芝居 (明治33年 (1900) まで)

筆者が現時点で紙面確認済の明治33年 (1900) までで地元ネタ芝居と思われるものは、以下の20点であった。それぞれの芝居化について言及した『岐阜日日新聞』記事を示し、元となった事件や上演状況について解説を付す。各タイトルは、事件名や人物名等記事内容を端的に示すものとした。タイトル横の日付は、●以下に引用した新聞記事の掲載日である (複数回記載があるものについては、原則として初出記事。記事内の振り仮名の取捨選択、記事本文内の空白の挿入、下線は筆者。同紙以外を典拠資料とするものはその旨明示)。なお、4)「松野殺し」と20)「大垣五人斬り」については、次章以降で詳説する。

1) 水野弥太郎 (岐阜の侠客) (明治19年 (1886) 6月10日)

●末広座 に於ては予て市川小伝治、市川照太郎の一座が興行中なりしが 昨日より二の替り大入をしたるよし 其戯題は 彼の岐阜の侠客水野弥太郎の騒動を演ずると云ふ

水野弥太郎は、幕末の新選組・赤報隊に参加した岐阜の侠客である。発生後間もない事件を迅速に芝居化したものではないが、ご当地物のひとつと言えよう。『岐阜県史 通史編 近代下』でも身近な事件に基づいた芝居の一例として挙げられている。同書では、19年末に水野弥太郎騒動の芝居があったとするが未詳。水野弥太郎を扱った芝居は12)にも見られるように、時折上演があったものかもしれない。

2) 東山大雄寺和尚と芸妓の情死 (明治19年 (1886) 12月25日)

●高山通信 芝居 当地の若者が言ひ合せて 来る廿五六日頃より幕明けする素人芝居の戯題は 当地東山大雄山和尚の芸妓と情死せしことを写し出せる 東山紅葉の錦といへる者のよし

同題名の芝居を、『岐阜県史 通史編 近代下』では21年6月に挙げているが、今回の調査では確認できなかった。『岐阜日日新聞』には、各地の情報を数点まとめて伝える「高山通信」のような地方記事が散見されるが、これはその中のひとつである。

3) 地元の芝居を脚色する戯作者(明治20年(1887)4月21日)

- 古錦鍋蓋の噂 と書き出せば 何だか訳の分らぬ妙な標題なるが 右標題の演劇脚本と
かを 当地加和屋町の春廼屋柳鞠とか云ふ風流人が編輯して 近日の中に出版するよしな
り 其果して面白きや笑可やは一閱の上ならでは知るによしなし

芝居上演の記事ではないが、『岐阜県史 通史編 近代下』で指摘されている戯作者の存在である。この脚本の実際の上演や出版は不明である。

4) 松野殺し(明治20年(1887)12月21日)

- 松野の芝居 当地伊奈波の国豊座に於ては 来廿一年一月一日より 坂東あずまの一座
が乗込み 大洞七三郎松野の事件を仕組み興行するよしなり

第3章にて詳述する。

5) 無理情死顛末(娼妓愛吉)(明治21年(1887)12月21日)

- 愛吉はまだ出ぬ 曾て我岐阜日日新聞に 無理情死未遂の顛末を記載したるを種本とし
て 稲葉国豊座にて芝居に為して大評判なりし 参州岡崎駅の信濃屋抱への娼妓愛吉は
此程同家より金津廓へ支店を出したるに付 両三日前に同廓に転籍し 娼妓営業を願ひ
出でたるよしを聞き 市中のお利口連は続々同家へ押かけ 愛吉を出せと申込みを 楼
主より同人は未だ営業許可のなきゆへ お座敷へは出せませぬと断られ 落胆して帰る
もの多しといふ

記事内の国豊座の芝居は未詳だが、芝居に言及した記事として挙げた。芝居の元となった無理情死未遂事件は、『岐阜日日新聞』で5月16、17日に報じられている。岡崎で、娼妓愛吉に執心した男が嘘をついて愛吉を連れ出し、心中を迫った事件である。国豊座で芝居になったとあるが、この頃の国豊座は4)松野殺しの芝居を連続して出している。同座は6月末から10月いっぱい修繕のため休業しており、11月に市川寿美蔵・中村伝五郎一座を呼び華々しく再開している。彼らの芝居は「檜木山相馬大作」(11月18日新聞記事)、「天神記出合仇討」(同27日)であり、これらが情死の芝居とは考えにくい。別座での興行、もしくは数日のみの興行だったか。

6) 強盗お鉄・多田常助(明治22年(1889)10月19日)

- 新聞芝居 当市伊奈波国豊座に於て 来る廿一日より中山喜寿の一座が 嘗て岐阜日日新聞に連載したる強盗お鉄多田常助の一条を小瀬車屋新聞と題し 之を十七幕に演ずるよし(以下場割略)

この芝居は10月21日に始まったが、10月27日紙面に「戯題替へ」「中止の申込」の記事がある。元となった事件関係者早川お鉄の実父が、事実の相違もあり自身の名誉に関することもあるので、芝居を中止してほしいと申し入れ、その結果、他の芝居に変更することになったという。「嘗て岐阜日日新聞に連載したる」とあるが、その記事は未確認である。

7) 娼妓廃業届の顛末(『金城新報』明治23年(1890)1月30日)

- 岐阜通信 今回当市の月廼家主人が小町桜名残の村雨と云へる演劇を脚本新作したるが 右は彼の金津廓山県屋の娼妓小町が警察署へ廃業届を出せし顛末を作りしものにて 目下廃

娼論熾んなる折柄なれば其土地の人に取ては面白かるべし

名古屋の新聞『金城新報』記事による。同月に同紙記者が岐阜の桜町誓願寺で行われた政談演説会に参加しており（岐阜日日新聞 1 月 15 日記事）、その際に情報を得たのかもしれない。『岐阜日日新聞』では該当する芝居が見当たらず、実際の上演はなかったか。

8) 本巣郡の馬喰殺害（明治23年（1890）5月22日）

●北方芝居 本巣北方町千歳座に於て 同地の俳優が曾て岐阜日々新聞に詳記したる同郡下真桑村の杉山浅太郎 同軽海村の堀部藤作が 三河出生の馬喰を殺害したる始末を 犀川傍軽海の大評判と云ふ戯題に仕組み 六幕引続きにて一昨二十日より大入したるに 非情の人気なるよし 尚ほ次は同じく 本紙上に掲げし同郡見延村の刃傷騒ぎを演ずるよし

本巣郡での事件を、同地の芝居小屋で同地の俳優が演じるという、究極の地元密着芝居である。「非情の人気」で、同様の地元ネタ芝居の興行を次にもするつもりだったようだが、わずか三日後に興行停止を命じられている²⁾。「曾て岐阜日々新聞に詳記したる」とあるが、その記事は未確認である。

9) 芸妓小六の阿諛（明治23年（1890）8月30日）

●二〇加師小六驚かす 昨今相生座にて興行し居る大阪の二〇加師東玉の一座は 何でも大入を占んとの勉強は至極感心だが 針程の事を棒の様に言て客足を曳は 彼等芸人どもの十八番で 当地の新聞に何か二〇加の種に成りさうな話しが無いかと 傍仮名あてのポツ／＼読で岐阜日々新聞を読んだは宜が 此程の紙上に記して置いた流行妓稲本の小六の一件を 何読誤つたかものか一昨々夜の大切に「明晩からは岐阜日々新聞に出ました小六と云ふ阿諛つき芸妓の事を脚色でご覧に入れます」と前披露をしたところ 丁度当夜小六が見物に行て居て 斯と驚いたにも驚かないにも転がらないばかりにして自宅へ帰り 彼の新聞に記てあつたのは（略）

即興芝居である俄狂言（記事では「二〇加」）は、臨機応変にその時、その土地に合わせた題材を取り上げやすい。新聞で知った阿諛芸妓小六のことを演じようとしたところ、小六本人から事実ではないというクレームが入り、結局お蔵入りになったという。

10) 大垣の情死（明治24年（1891）7月23日）

●安八郡大垣町通信 壮士芝居 明治裁判弁護の誉にて喝采を博したる壮士芝居石本一雄の一座は本日より お光綱次郎夢の新橋と云ふ戯題にて 当町に在りし情死の場を演ずるよし

壮士は、自由民権活動に携わる青年たちのことで、彼らが政治思想を伝えるために演じたのが壮士芝居である。大垣町で起きた情死事件を芝居にしたもので、『岐阜県史 通史編 近代下』で指摘されている「お光綱次郎夢の新橋」である。演じた石本一雄一座は、7月4日から岐阜市の相生座での「明治裁判弁護誉」が大好評の壮士芝居一座で、14日の欄外記事「壮士演劇大垣に赴く」に、大垣の愛盛座で15日から興行とある。その記事に、喝采を博した「明治裁判弁護誉」に引き続き二の替りとして「過日大垣〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ずると言へば 之も大当りならん」と書かれている。欄外に記された記事であるため、新聞紙の折り目に当たる部分の文字が判読で

きないが、ルビから大垣で起きた心中事件を芝居にしたことは容易に類推できる。元となった事件の探索は行き届かなかったが、石本一座が興行地に合わせたご当地物をわざわざ選んでいることは興味深い。この芝居は、7月28日「壮士演劇北方に行く」に、「過日同地（＝大垣）にありし情死しんじう むすぶゆめうきなをしがらみ「結夢浮名柵」を演ぜしに 大喝采を博し非常の大入なりし」とあるように、予想通り大当たりする。翌29日の「本巢郡北方町通信」でも、「暑気の候なるにも拘らず非常の好人気にて 同日の如きは場内立錫の余地もなかりし」という人気ぶりが伝えられている。

11) 金津廓の情死未遂（明治25年（1892）7月7日）

●金津廓情死の狂言 別項の寿幸吉情死未遂一件を狂言に仕組みくるわがへり「廓 帰 夏野の朝露」と名づけて 当市笹土町蛭子座に先頃より大人気の堀井女仙助一座が今晚より演ずるよしなり「別項」というのは、同一紙面に掲載の「情死未遂の男八代幸吉」という記事である。7月3日の「金津廓の情死未遂」記事でも既報で、それらによると、幸吉は娼妓寿と情死しようと寿を刺したが殺害に至らず、怪我を負わせた後自身はその場を離れ、外に出て徘徊していたところを捕らえられたという。寿は幸い命を取り留め、幸吉は監獄内でも自殺を図ったが死ねなかったという「未遂」の顛末である。

12) 水野弥太郎（明治26年（1893）11月21日）

●水野弥太郎の芝居 当市美殿町泉座に於て興行中なる山崎河蔵一座の芝居は 今廿一日より二の替りとして 当市矢崎町の俠客故水野弥太郎の一代記及び切狂言として椿説弓張月を出すといふ
前出1)参照。

13) 高田町の短銃自殺（明治29年（1896）3月19日）

●高田町の芝居 多芸郡高田町に於て 来る二十日頃より 同郡上多度村の吉川俊一短銃自殺（此頃の本紙雑報に記載したり）の顛末を芝居に仕組み興行するとか云へり
元となった事件の記事は未探索だが、地元事件の芝居化であることは明らかである。

14) 七軒町の二人殺し（明治29年（1896）4月30日）

●泉座の合併芝居 当市美殿町の泉座にては 明一日より俳優市川白猿及び壮士俳優志津村○夫等との合併一座にて 目下評判の七軒町二人殺しを脚色み「岐阜奇問二人謀殺血染洋服」といふサテ窮屈さうな名題を据て（続八冊）一番目に出し 二番目には「刈萱僧門筑紫土産」上中下を出すよし
この芝居の元となった事件は、4月26日の紙面に「七軒町の二人殺し」と報じられている。洋服裁縫業松川屋の奉公人吉野周作が、抱え主の養女お梅に懸想したが相手にされないことを恨みに思い、お梅とその養母を惨殺した事件である。同事件は、美殿町の泉座と同時に、伊奈波の末広座でも、急遽5月1日から「意外の洋服」という演目で上演されている（次項参照）。また、泉座の芝居は、その後名古屋の千歳座でも5月11日から上演されており³⁾、この地元ネタ芝居の集客が好調だったことが推測できる。

15) 七軒町の二人殺し（明治29年（1896）5月2日）

●末広座の差し加へ 前号に記したる当市末広町末広座芝居は 俄かに七軒町二人殺し事件を「意外の洋服」といふ妙な名題にて 八冊として差し加え昨日より興行せり
前出14)参照。

16) 高山の短銃情婦銃殺（明治30年（1897）6月4日）

●新演劇の流行 去月廿五日より大野郡高山町喜多座に於て興行しつゝある新演劇は 二月五日の本紙を以て報道に及びたる 彼の短銃事件を以て情婦を撃殺し己も亦死せんとして死切れず 為に捕へられて 目下岐阜監獄署に服役中なる元中切尋常小学校訓導荒木力之助が当時を仕組たる者にて 芸題は（唐木力之助上倉コウ恋の奇談連理の短銃）と命名し初段高山町八幡社祭礼情婦見初の間より 警官医師現場立会臨検の間まで都合十一幕 日大入を占つゝある由

「二月五日の本紙を以て報道に及びたる」とあるが、実際の記事は、第一報が3月5日「又高山の殺人犯」、詳報が同7日「痴情の果」である。高山町の尋常小学校訓導の荒木力之助が上村トウに振られ、その恨みが高じてトウを射殺、自身も頭を撃ったという事件である。力之助がトウを見つけて後を追いつつ襲うのだが、見つけたのは高山町喜多座の芝居見物である。事件の契機となった喜多座で、その事件に基づく芝居が演じられるという、地元ネタ芝居ならではの様相である。

17) 多治見町の実父殺し嫌疑（明治33年（1900）3月29日）

●榎本座の新演劇 土岐郡多治見町榎本座に於ては 近日中に今回同町に於ける実父殺し嫌疑事件の壮士芝居を興行する由

3月5日に、土岐郡多治見町の穀商加藤政治郎と妻シゲが、実父佐平を謀殺した嫌疑がかけられ護送されたという記事（「実父殺しの嫌疑者護送」）がある。しかし、27日「実父謀殺嫌疑者」では、妻シゲは嫌疑なしとなり放免されたとある。実際の上演があったかは不明。

18) 金津廓の無理情死（明治33年（1900）7月18日）

●短銃事件の芝居 美殿座にて興行中の武知一座は 今回の金津廓におけるピストル事件を仕組み近々興行する由

この事件の一報は、7月15日紙面の欄外に「銃殺の騒動」として急遽掲載され、詳細は17日に「金津廓の無理情死」と題し詳しく報道されている。財産家の息子大西友三郎が金津廓の芸者秀子に入れ揚げ子まで為したが、秀子は一文無しになった友三郎を相手にしなくなる。それを恨んだ友三郎が、短銃を手に廓に向かい、秀子を撃った後自殺した事件である。美殿座の武知一座によるこの事件の芝居については、7月21日に美殿座の三の替りの二番目で演じること、題が「くるわのうわさしつと 廓 噂嫉妬の銃声（一名ピストル事件）」であることが報じられている。更に24日記事に「美殿座の新演劇ピストル事件を見んと入込む者少なからず」とあり、身近で起きたセンセーショナルな事件に人々の興味が集まっていることが分かる。

19) 高山の教員同士の恋愛（明治33年（1900）10月5日）

- 新作狂言の筋書 この程飛州高山中教院師範学校裁縫講習所に起りたる活劇により 或る人か物せし「積る恋浮名の狂淫」と題する一篇の筋書は 時節柄大根陳列会の脚本に此上なきものとも思はるゝまゝ左に記しぬ（略）

高山の中教院師範学校裁縫講習所において女性教員と男性教員が密かに想いを寄せ合っていることを、素人芝居（大根陳列会⁴⁾）向け脚本として10月5、6日の両日に掲載したものである。しかし、事実無根であったとして9日に取消記事が掲載されている。実際の上演はなかったであろう。

20) 大垣五人斬り（明治33年（1900）10月9日）

- 国豊座二の替り興行 伊奈波国豊座にて興行中の九州審美社一座の新演劇は 昨八日より二の替り狂言として 過日の本紙に詳報せし大垣在の意趣斬りを仕組みて「大評判大垣の五人斬り」と題しブツ通しにて興行
第4章にて詳述する。

これらのうち、芝居の元となった事件の詳細、芝居化の様相、公判等の事件後の経過が詳しく追えるのは、4)「松野殺し」と20)「大垣五人斬り」である。前者が明治20年（1887）、後者が33年（1900）と若干時期が離れており、大局を眺めるのに適当である。以下それぞれについて詳述する。

3. 松野殺し

この事件の『岐阜日日新聞』における初報は、明治20年（1887）12月11日の「朝の霜」と題する記事である。18、9歳の別嬪が「岐阜美江寺町観音堂の前に ^{のどもと}咽喉部に一ヶ所^{ふか}の深傷」を負って倒れているのを住僧が発見し、派出所に届けた。両脚を紐で括っていることから覚悟の自殺と思われたが、人手にかかったような様子もある。近くに血に染まった手ぬぐい、屑紙、友禅縮緬の袱紗に包まれた短刀があった。女性が所持していた守り袋の中には、10月20日付で大洞七三郎が本田まつの（松野）に宛てた「取為換約定書」が入っていた。そこには、17年7月13日より七三郎と松野が忍び会うようになり、このほど松野のために料理店を開店すること、もし七三郎から松野を離縁した場合は、商売道具はすべて松野に渡すことが記載されていた。

同日に「別項に記せし」という記事があり、そこに、大洞七三郎が岐阜下竹町の古道具商で、事情を聴くために岐阜警察署に拘留中であること、女性は岐阜泉町の古道具屋本田糸蔵の19歳の長女松野であることが書かれている。松野は一昨夜、外出する際に両親に向かって「今夜は 兼て婚姻の契約ある厚見郡早田村の何某といへるが 末広町の玉井仁助方より呼びに越したれば 右へ赴くなり」と言ったという。

謎に満ちた凄惨な死に見舞われた松野の履歴が、12月14日、16日、18日、21日、23日の五日にわたって連載される。松野は、古道具屋の父と母との三人暮らしであった。妻子持ちであることを隠した伊賀田という男性と恋仲になるが、その妻にばれて別れる。その後小谷三七郎（大洞七三郎の誤りか⁵⁾）を忍び男とする一方、厚見郡早田村の杉野昌太郎を旦那に取り毎月いくらか

の手当をもらうようになる。小谷三七郎は松野のために料理店の開業準備を進めるが、杉野は松野の両親に自分を養子にせよと迫る。三七郎は、杉野の養子の件を聞いても、松野さえ承諾すれば彼女と自分が一緒になることは容易いと考えて料理店を開業したが、杉野は松野と夫婦同様の生活を始めてしまう。松野は三七郎への義理が立たないと塞いでいたが、遂に10日朝、松野が三七郎に殺される惨劇が起きてしまった。

連載五日のうち、四日目までは妻子持ち伊賀田と松野の話で、今回の事件の焦点である大洞七三郎（小谷三七郎）の松野殺害の件は、補足程度の記載にすぎない。連載最終日の紙面に、大洞七三郎に謀殺の嫌疑がかかり、監獄署に護送されたという記事があるように、まだ「七三郎による松野殺し」という枠組みで報道することができなかったのかもしれない。

松野殺しの芝居化を報じる最も早い記事は、事件後わずか11日の12月21日に見られる。妻子持ち伊賀田との話ではなく、大洞七三郎と松野に焦点を当てた芝居である。二日後の23日には、即興芝居の俄でも同事件を取り上げると伝えられる。

- 松野の芝居 当地伊奈波の国豊座に於ては 来廿一年一月一日より 坂東あずまの一座が 乗り込み 大洞七三郎松野の事件を芝居に仕組み興行するよしなり（12月21日）
- 二〇加 当地白木町栄座の持ち主車屋弥七は 美江寺町にて松野殺の一件を以て 名古屋の桂文福の一座に二〇加を仕組ませ 明年一月一日より万力町の相生座にて興行するよし（12月23日）

後者で目を引くのは、小屋の持ち主が題材を指定して名古屋の俳優に依頼している点である。この興行の実際は不明であるが、相生座では1月8日から政談演説会が行われているため、実現していた場合、期間は1週間以内である。

前者の国豊座の松野殺し芝居については、年明けに以下2点の記事が認められた。

- 二の替り 当地伊奈波国豊座に於ては 明日より二の替り狂言を出すよしなるが 切狂言として彼の昨今市中に噂高き美江寺観音松野殺しを演ずると云ふ（1月6日）
- 二の替り 当地伊奈波国豊座に於ては 二の替り狂言に彼の市中に噂高き美江寺観音堂松野殺しを演するよし前号に掲載せしが 右は其筋の許可にならざるより見合となし 其代りに花襷雪見の仇討と云ふを演するよしなり（1月7日）

1月6日に明日から松野殺しを上演する予定だったと報じたにもかかわらず、当日になって「其筋の許可」が下りず中止となってしまったのである。許可が下りなかった理由も、その後の上演がどうなったのかも不明である。ところが、この事件は数ヶ月後、大いに盛り上がることになる。

明治21年（1888）3月25日に、大洞七三郎の松野殺しの公判が近々開廷と報じられる⁶⁾。公判は5月に開廷し、『岐阜日日新聞』で詳細な公判傍聴記が5月13日、15～20日、22日に連載される。事件直後の松野の履歴の連載では、大洞七三郎の扱いは小さかったが、この公判記録では関係者の証言も細かく記載され、事件に至った経緯が明らかにされる。先に報道された内容と、微妙に事実が相違している。

松野と七三郎の関係は、明治17年（1884）7月に、糸商だった七三郎が訪問した糸製造方で糸取りをしていた松野と知り合ったことから始まる。七三郎はその後糸商を辞め松野と会わなくなったが、商売替えした古物商が、松野の父本田糸蔵と同じ職であったことから、偶然松野と再会する。その時松野は早田村の松原栄蔵と親密になっており、またそれとは別に、小栗鶴吉郎という人を養子にもらう話もあった。松野は、それらの関係を断つから料理店をやらせてほしいと

七三郎に言う。七三郎は自身の職や妻子があるにもかかわらず、仲間と組合を作り店舗を探し開店させてやる。栄蔵・鶴吉郎との関係を断つ条件での開店だったが、栄蔵との関係は切れず、その店に松野とともに飲食に来ることすらあったという。松野は、七三郎が自分を見捨てたら心細いので、七三郎から別れを言い出した場合は店の道具一式を自分がもらえるという書付が欲しいと言い、さらに、もし自分から離別を望んだときは、命を差し出すと言ったという。事件の二日前の12月8日に、どうしても七三郎とは一緒になれないので死のうと松野が言い出す。二人は美江寺観音に赴き、七三郎が松野を殺したところで人声がしたため、七三郎は自宅に帰って死のうとしたが、妻がそれを止めた。七三郎はその後警察に捕縛され、死ぬ気はなくなったと述べる。公判では、書付作成の経緯や松野を手にかけていた状況が細かく尋ねられている。

公判を聞きたい野次馬も殺到する⁷⁾。この盛り上がりを見逃さじと云ったところか、この時期に芝居化計画が相次ぐ。まず、講談と素人芝居の計画が持ち上がる。

- 松野殺の講談 来る二十日より講談師白龍を傭聘し 伊奈波国豊座に於て 岐阜日々新聞傍聴筆記と云ふ題にて 彼大洞七三郎が松野殺しの一件を毎夜二席づゝ 講談せしむる由又当市中の芝居好嗜の素人連中が集り 同事件を一の演劇に仕組み一興行せんと 目下協議中なりと云ふ(明治21年(1888)5月18日)

次いで、相生座で松野殺しの影絵をすることになったが、芸人の到着が遅れ、許可も取っていなかったのか、なかなか上演されない。ようやく上演したが結局は差し止めになってしまった。

- 影絵 昨二十九日夜より当地相生座に於て 影絵を興行するよしにて 曾て本紙掲げたる傍聴筆記に據り 彼の松野殺し大洞七三郎の事を演ずるよしなり(5月30日)
- 見物人の苦情 一昨十九日夜より当地万力町相生座にて大入せし影絵は 予て噂せし如く岐阜日日新聞の傍聴筆記松野殺しを演ずると云ふ触出しにて 辻札等も出し置きたるより影絵位の事なれども 当市中の者は松の殺なればとて 夕方より見物人は場に満ち待ちかけたるに 如何なる都合にや 更に松の殺しの絵を写さざるより 見物人は大に不服を唱へ 陳腐の影絵を見たくない 早く松野殺しを演せよと嘖鳴立つるも 興行人は見物人に向ひ 松野殺しを演ずる芸人は 本日大垣より来る終列車に乗り後れたれば 明晩よりは必ず御覧に入るべければ 今晚丈は御辛抱下されたしと詫るに付 漸く見物人も堪忍して退場せしが 該夜之を演せざるは道理にて 昨三十日まで未だ松野殺しの件は岐阜警察署へ願出でもせぬとの事なり 如何の訳にや(5月31日)

- 差止め 当地万力町相生座にて興行中の影絵松野殺の分は 一昨夜写し出したる処にて差支のありしか 岐阜警察署より松野殺の分丈け差止に為りたり(6月3日)

この差し止めについては、お上からの差し止めではなく、松野の親からの嘆願により上演を止めたという事情が明かされる。

- 差止にあらず 一昨三日の本紙に差止と題して掲載したる 万力町相生座の影絵松野殺を中止せしとは事実相違にて 右は松野の親本田糸蔵が岐阜警察署へ出頭し 私の娘の事を相生座にて影絵を興行するが 何卒止させて貰ひます事は成りませぬかと 泣く願出たるに付 詰合の警官は影絵位なれば差支なしと思ひ許可せしが 一応同座主に談ずべしとて帰されたるが 後に相生座主田邊弥七を呼び 右の次第を談示 且つ本人の迷惑なる事なれば 他の戯題を演じては如何にと諭されたるに 俠気のある弥七なれば 速に承諾し即夜より松野殺しの戯題を中止して 本田糸蔵の意を充てしえたるものゝよしなれば

正誤旁々再び茲に詳記す（6月5日）

第三者にとっては身近な事件は面白いが、身内にとっては辛く居たまれなかったであろう。その思いを汲んで中止した座主の判断であった。

しかし、松野殺しは、国豊座にて芸妓芝居と女芝居に相次いで取り上げられ、いずれも大人気となった。先行するのは芸妓芝居である。

●松野殺の芝居 来る五日より当地伊奈波国豊座に於て 芸妓芝居中村春吉の一座が 彼の
大洞七三郎松野殺を主とし 金華山麓^{ふもとみたらしいけけうはくしんぢう} 御洗池強迫情死未遂等の新作物を興行するよし（6月3日）

●国豊座の新作狂言（略）一昨夜当地の稲葉国豊座にて幕明したる中村春吉一座の芸妓芝居は 新聞記事の新作物なりとて非常の大入にて 通札殆んど二千枚に及びたり（略）（6月8日）

芸妓芝居後すぐ同じ国豊座で、今度は女芝居で松野殺しが演じられる。道具が揃わず開始が一日遅れたが、客の入りは上々であった。6月16日の記事によれば、松野を大洞七三郎と争った松原栄蔵本人が芝居を観に来ていたということで、場内のざわめきがいかにひどであったか想像に難くない。

●芝居興行 伊奈波国豊座に於ては 愈々大洞七三郎松野殺の一件を 明十三日より女芝居にて興行する由（6月12日）

●松野殺演劇の幕数 本日開場すべき伊奈波国豊座の松野殺の芝居は 道具等の揃はざるため又一日延引し 愈々明日開場す 其幕数は 第一玉井仁郎宅の場 第二金花楼開店の場 第三七三郎宅の場 第四二度目金花楼の場 第五同二階の場 第六美江寺町観音堂松野殺の場 第七大洞七三郎妻子に分るゝ場 第八大洞七三郎岐阜警察署へ拘引の場にて 都合八幕を演ずるよし（6月13日）

●国豊座の演劇 一昨十四日幕明せし伊奈波国豊座の芝居は 例の松の殺の評判故か 小芝居に似ず大入にて 無慮千八百人の見物にて 猶ほ続々詰めかけるが 午後四時過に既に木戸をメ切たるよし 又彼の関係の早田村松原栄蔵が見物に来て居りしを 他よりぞめき幕間は為に大喧噪しなりしと云ふ（6月16日）

このように、松野殺しは、12月の事件直後の1月の上演は見送られたが、5月の公判で再度世間の耳目を集め、6月から講談、素人芝居、影絵、芸妓芝居、女芝居の題材となっている。松野殺しを取り上げた座に注目すると、身内の訴えにより中止となった相生町の影絵以外の講談、芸妓芝居、女芝居はいずれも国豊座である。伊奈波地域には大きな芝居小屋として末広座と国豊座があったが⁸⁾、末広座は明治19年（1886）11月に火事で焼失しており、松野殺しが演じられていた当時、国豊座が唯一の芝居小屋であった。また、国豊座は松野殺しの芝居後の6月下旬から10月まで修繕のため休業している⁹⁾。つまり、伊奈波地域でいわば独り勝ちであった国豊座が、休業前のドル箱として松野殺しシリーズを展開したと考えられるわけである。事件そのもののインパクトとともに、新聞で詳細に報告された公判内容、国豊座の戦略が相まって、松野殺しは大いに当時の岐阜で話題をさらっていたのである。

松野殺しには、後日談がある。

●怪談 当市下竹町の某が住居する家は 嘗て情婦マツノを殺して処刑を受けたる大洞七三郎が住居せし家なる故 マツノの怨魂が為す業など、口賢なき児守女等がいふのみなら

ず 主人が云ふ所に據るも 毎夜同家に於て怪しき事ありといふは 膳棚に揚げ置きたる飯櫃 又は流し下に据置きたる鉢杯が 夜中に自然と地上に落ち 又は蓋さりとて其置所を變するも 更に破損し居らずといふものあり 怨かあれば其本人崇るべし 何ぞ其家屋に仇するの理あらん 是は他人を欺くの戯談を為したるものにて 家主に取りては迷惑なる浮説なれば 信すべからざるの怪談として 茲に一寸(明治22年(1889)6月13日)

大洞七三郎の旧居で怪奇現象が起きるという話である。ただの噂だと記事では否定しているが、このような話がまことしやかに流れるほど、松野殺しは当時の岐阜のだれしもが知る大事件でありゴシップだったのである。

4. 大垣五人斬り

この事件の第一報は、明治33年(1900)10月2日の「大垣在の意趣切り(五人を斬り一戸を焼く)」である。その記事によると、事件の概要は以下のとおりである。

9月30日午後10時半頃、大垣町付近の安八郡三城村大村の平民農兼酒造家であり、同郡郡会議員豪農松永治三郎(46)宅に、同人に恨みを持つ松永扇次郎(52)が刀を手に押し入り、治三郎他4名に重軽傷を負わせた。その後同村助役稲川錠吉方に向い、火を放って全焼させた。扇次郎は、かつては土地持ちで裕福であったが、明治15年(1882)に、妻が実兄道三郎と通じたことに怒り心頭に発し道三郎を殺害し、無期徒刑に処せられた。治三郎は、相続人がいなくなった扇次郎の財産を実弟九三郎の名義に書き換えた。無期徒刑のはずの扇次郎だったが、皇太后崩御の特典で減刑され、30年(1897)11月に放免され帰村する。しかし帰村後、自身の財産が全て九三郎の手に渡っていることに不満を強める。治三郎側は、扇次郎に定期的な手当てを与えるなどの配慮をしたが、扇次郎の遺恨は消えず、治三郎と、財産の書き換えをした稲川錠吉への復讐の念を強めていた。事件当夜、扇次郎は刀を手に治三郎宅に躍り込み、治三郎、治三郎妻、治三郎甥(治三郎弟九三郎息子)、九三郎妻、九三郎娘の5人に斬りかかった。治三郎は極めて重傷であった。扇次郎は、その後稲川錠吉宅に行き火を放った。

その後の関連記事を追うと、10月12日に深手を負った松永治三郎が息絶えたことが報じられる¹⁰⁾。被告松永扇次郎に対する公判は11月26日に始まり、27日に公判の状況、29日に死刑宣告がなされたこと、彼がそれに服せず控訴することが報じられる¹¹⁾。12月8～9日、11日の紙面には、「松永扇次(ママ)の死刑宣告書」が連日掲げられる。多くの地元ネタ芝居が恋愛絡みであるのに対して、この事件は、8歳と5歳の子どもも斬りつけられるという、欲と恨みがまわりついた凄惨なものであった。

この事件の芝居は、壮士芝居で繰り返されている。壮士とは、政治運動にたずさわる血気盛んな青年のことである。明治20年(1887年)発布の保安条令以来、政談演説が禁止されるなど政治運動が弾圧されるなか、壮士たちは芝居を通じて自由民権思想を伝えようとする。これが壮士芝居・書生芝居と呼ばれるものである。壮士の中には、確固とした政治思想を持ち合わせず、ただ騒ぎたいだけの者もいたが、彼らの若さに任せた粗野で勢いのある演技が面白がられ、一世を風靡した。大垣五人斬りも、刀を振り回した派手な芝居になる題材として好まれたのであろう。複数の劇団が芝居化している。

●国豊座二の替り興行 伊奈波国豊座にて興行中の九州審美社一座の新演劇は 昨八日より

二の替り狂言として 過日の本紙に詳報せし大垣在の意趣斬りを仕組みて「大評判大垣の五人斬り」と題しブツ通しにて興行（明治33年（1900）10月9日）

- 寿座の三の替 揖斐郡池田村寿座にて興行中なりし丸山剣昇一座は 去る十日より三の替り芸題大村五人斬を興行し 引続き大入を占め居るよし（10月13日）
- 高砂座の壮士芝居 再昨十三日より大垣町字船町高砂座にて 梨園団壮士一座の芝居大入せしが 芸題は「大垣輪中恨の血刀」とて 三城村松永家の五人斬り新演劇とて物珍らしきまゝ、非常の大入を占め居れりと云ふ（10月16日）
- 美成社一座 大阪壮士美成社一座は 先頃来本巢郡地方へ入込み 大村五人斬の新演劇を興行し 到る処大入を占め居る由）（11月1日）

この事件については、「五人斬演説会」なるものまで開かれ、壮士数名が松永家五人斬の原因に関する公開演説を行っている¹²⁾。地元ネタ芝居は、野次馬的興味が最優先で、事件の社会的背景を考えるような深まりはない。しかし、この事件については芝居のみならず原因を考える演説会も開かれていたのである。壮士たちのこの事件への関心が、並々ならぬものであったことがうかがえる。

前出の松野殺しが国豊座という場で統一されていたのに対し、大垣五人斬りは壮士という共通項で括することができる。恋愛沙汰ではない点で壮士演劇との相性が良かったのではないだろうか。また、松野殺しとは芝居化のタイミングも異なる。松野殺しは、事件から約半年後の公判とともに芝居熱が高まったが、大垣五人斬りは、事件が起きたのが10月2日、公判が11月26日開始なのに対し、芝居化は早くも公判前の10月9日、13日、16日、11月1日にその記事が見られる。壮士芝居では、その土地その土地で受けるネタを素早く貪欲に取り込んでいたのである。この素早さは熱が冷めるのも早いことを予想させる。次の目新しいネタが見つければ、再演することはなかっただろう。明治34年（1901）の紙面は未調査だが、大垣五人斬りの芝居が翌年にも行われていた可能性は低いと予想している。

5. 地元ネタ芝居の背景と周辺

現在でも、実際の事件に基づいた映画やテレビドラマや小説は珍しくない。衝撃的な事件は、以前ならテレビのワイドショー、今ならネットニュースで報じられ、週刊誌で大きく取り上げられ、人々の目に触れる。明治期の岐阜で人々が吸い寄せられた地元ネタ芝居も、観たい、知りたいという素朴な関心という点では、現代と大きくは変わらない。不謹慎ではあるが、身近なゴシップについて好奇心がそそられてしまうのは、致し方ないところがある。

当然ながら、現代と違う点ももちろんある。松野殺しで、事件後約十日で芝居化が試みられ、大垣五人斬りでも約一週間で芝居になっているように、とにかくスピードが速い。これは、時間が経ってしまうと人々の関心が薄れるため、新鮮なうちに芝居してしまおうという興行側や演者の目論見である。スピード重視だから当然内容の誤りや曲解もあったろう。第1章9)芸妓小六の阿諛や、19)高山の教員同士の恋愛がその例である。現代人の感覚からすると、面白ければいいのかといいたくなるが、まだまだ新聞や情報との付き合いが浅く、プライバシーという概念すら存在しない明治期の所業について、現代の感覚で物申すのは論外である。

しかし、中には、第1章6)強盗お鉄・多田常助や、第3章松野殺しの影絵のように、事件関

係者の身内の訴えで上演が見送られる例があった。題材にされてしまった側にも対抗策があったのである。また、芝居内の登場人物の名前を微妙に変えている（第1章16）の荒木力之助・上村トウを、唐木力之助・上倉コウに変更）のも配慮と言えれば配慮かもしれない。地元ネタ芝居はいわば際物で、上演が繰り返されるものではなかったことは、関係者にとっては救いだったろう。

今回は、松野殺しと大垣五人斬りを詳しく取り上げたが、前者は国豊座の戦略があったらしいこと、後者は壮士に好まれたことが興味深かった。松野殺しのような男女間のもつれによる殺人事件や心中事件の記事は、他にも少なからずあったが、それらがすべて芝居になったわけではない。松野殺しだけがなぜ特異な盛り上がりを見せたのか不思議に思っていたが、男性3人をあしらった松野のしたたかさや、国豊座の戦略がその理由だろう。後者の大垣五人斬りについては、この時期の岐阜に大垣五人斬りを芝居に仕組んだ壮士芝居の一座が4団体もあったことに驚いた。この時期、岐阜だけでも4団体いたということは、全国で何団体あったのか。それぞれの団体が、興行先で目新しいネタを探して素早く芝居化していたのであれば、とんでもない数の地元ネタ芝居が各地で展開されていたことになる。

今回の調査の反省点としては、それぞれの芝居の演者・団体について、詳細を明らかにできなかったことがある。芸妓芝居、女芝居、壮士芝居のいずれについても目配りが不十分である。今後の課題である。

地元ネタ芝居は、その地域だけ、そのゴシップが盛り上がっている間だけ観客を引きつけた一発花火のような芝居である。そのような芝居を、時宜を逸さず上演しようという興行側、好奇心から劇場に足を運ぶ観客側の双方の姿を、かなりくつきり浮かび上がらせることができた。明治期の岐阜の芝居は、斯くも賑やかで、ある意味不謹慎で、活気に溢れていたのである。

注

- 1 本稿では、基本的に「地芝居」を用いるが、引用記事中の素人芝居・村芝居等の用語も適宜用いる。
- 2 「●北方芝居 過日本紙に記載したる本巢郡北方町の芝居は 一昨日其筋より興行停止を命ぜられたり」（明治23年（1890）5月25日）
- 3 「千歳座（略）切が岐阜奇問松川屋事件「二人謀殺血染洋服」五冊にて 此松川屋事件は先月二十五六日頃岐阜にありたる出来事にて 加害者周作の衣類其他所持品は悉皆実物を以て演じ 先頃岐阜泉座にて好評を得たる狂言なりと云ふ」（『扶桑新聞』明治29年（1896）5月9日）。同紙では、4月26日欄外、28日付録岐阜雑報に元となった事件の実説を掲載している。
- 4 演技力のない素人役者を「大根（役者）」と呼ぶところから、素人芝居を皮肉る表現。
- 5 小谷三七郎が松野のために料理店の開業を進めているところから、大洞七三郎と同一人物と考えられる。名前も類似している。同記事内では、「杉野」と書くべきところが「松野」となっている等、記述が不正確である。
- 6 「●お松殺しの公判 彼の噂の高き当地下竹町の大洞七三郎お松に関する重罪裁判は 愈々^{いよへ}近々開庭さるゝ由なるが 其の弁護人は太田町の原弘道氏なりと云へり」（明治21年（1888）3月25日）
- 7 傍聴人の数が膨れ上がっていく様子が記事からうかがえる。「●松の殺の公判 予て報道せし如く 松野殺し大洞七三郎の重罪被告事件公判は 愈々^{いよへ}昨十二日を以て 岐阜始審議裁判所

内に開ける岐阜重罪裁判所に開かれたり 今其景況を記さんに 当日傍聴人には兼て噂を知る者から 早朝より門内に詰め掛けたる者凡七十人 聴て午前十時ともなれば 一同は先つ訴訟に控えたり (略)」(明治21年 (1888) 5月13日)、「●松野殺の公判 同公判は昨日も引続き開廷せられしか 同日の傍聴人は実に非常の人にて 午前十時にあつて 已に傍聴牌の番号は二百五十七号に達したりといへは 三百名以上となり 到底公判廷内に容るへからざるを以て 廷外にも腰掛けを並べて之れより傍聴せしむるなど 内外立錫の余地なし (略)」(5月17日)、「●松の殺の公判 同公判は引続き昨日も亦開廷せられ 同日雨天なりしにも拘らず 傍聴人は三百名許 (略)」(5月18日)

- 8 拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋一末広座と国豊座一」(『岐阜大学留学生センター紀要2014』2015.7)、「岐阜の伊奈波の芝居小屋 (2) 一末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興一」(『岐阜大学留学生センター紀要2015』2016.7) 参照。
- 9 「●国豊座 同座は目下修繕中のよしに 修繕落成次第 名ある俳優を招き一興行なすといふ」(明治21年 (1888) 6月26日)
- 10 「●負傷者の死去 安八郡三城村五人斬の主人公なる松永治三郎は 一昨日遂に死亡したり」(明治33年 (1900) 10月12日)
- 11 それぞれ該当する記事は以下の通り。「●五人斬公判 本年九月三十一^(ママ)日夜 安八郡三城村大字大村松永扇次郎 (五十二年) が 同村酒造家にして郡会議員なる松永治三郎外四人を斬り 更らに同村助役稲川錠吉方に^{いた}抵り火を放ち 遂に全焼せしめし事は 其当時の本紙に記載せしが 其後扇次郎は岐阜地方裁判所に於て予審取調中なりしが 愈々明二十六日午前九時より公判を開廷さるゝといふ」(明治33年 (1900) 11月25日)、「●五人斬の公判 日外の本紙に記載せし 安八郡三城村大字大村 当時大垣町字西岡に居住する松永扇次郎 (五十二年) が 去九月三十日午後十時頃 三城村大字大村松永治三郎外四人に重軽傷を負はしめ 更らに同村助役稲川錠吉方に至り放火し 遂に一戸を全焼せしめたる 近来稀有の被告事件の公判は 昨日午前十時二十分岐阜地方裁判所刑事部第一公廷に於て開かる (略) 因みに記す 明二十八日午前九時を以て宣告ある筈」(11月27日)、「●扇次郎の死刑 安八郡三城村大字大村当時大垣町居住の松永扇次郎が五人斬の公判の様子は 前々号に掲げしが 昨日同人は謀殺既遂、謀殺未遂、放火既遂の三罪に該当せりと理由を以て 検事の求刑せし如く死刑に処せられたるが 同人は之に服せず控訴する由)」(11月29日)。
- 12 「●五人斬演説会 明四日安八郡牧村にて 壮士鈴木景孝外数名を雇ひ 松永家五人斬の原因に関する公開演説を開く由」(明治33年 (1900) 11月3日)

参考文献

岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』大衆書房 1972

土谷桃子「板垣退助岐阜遭難の芝居一明治十五年の作品を中心に一」『岐阜大学国語国文学』38号 2012.3

土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋一末広座と国豊座一」『岐阜大学留学生センター紀要2014』2015.7

土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋 (2) 一末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興一」『岐阜大学留学生センター紀要2015』2016.7

土谷桃子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿（明治初年～）』JSPS科研費25370213助成調査成果
2016.3

土谷桃子「岐阜の地芝居の足跡 ―『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉獵から―」『岐阜大学
留学生センター紀要2017』 2018.7

『近代歌舞伎年表 名古屋篇 第2巻』八木書店 2008

『近代歌舞伎年表 名古屋篇 第3巻』八木書店 2009

『岐阜日日新聞』（明治14年（1881）～33年（1900））

『金城新報』（明治23年（1890）1月）

『扶桑新聞』（明治29年（1896）4月・5月）

日本語教育分野における「キャリア」に関する研究の動向

—2004年から2022年までの文献調査から—

Trends in Research on “Careers” in the Field of Japanese Language Education
: A Survey of the Literature from 2004 to 2022

松尾 憲暁・山本 晋也・高井 かおり

要旨：

本研究では、日本語教育分野におけるキャリア研究が、誰を対象に、何を論じてきたのかについて、NII 学術情報ナビゲータ (CiNii) を用いて文献調査を実施した。「日本語教育」及び「キャリア」をキーワードとして検索を行った結果、計124本の論文がヒットした。日本語教育分野において「キャリア」という用語が継続的に見られるようになったのは2004年以降であり、2016年もしくは2018年を境に増加傾向にあること、主な対象は日本国内の教育機関に在籍する留学生であるが、広範な対象についても論じられていることが明らかになった。研究テーマは「就職及びキャリア支援のあり方」「日本語授業におけるキャリア教育実践のあり方」「キャリアに焦点を当てた日本語学習者研究」「キャリアに焦点を当てた日本語教師研究」の4つに大別された。本研究の結果から2つのことが言える。一つは、日本語学習者の多様化と並行して、「キャリア」を扱う研究における研究対象が多様化、細分化されていること、もう一つは、「キャリア」の捉え方が、個人の将来選択に関わる資質や能力、特に日本語能力の育成に関わるものから、個人の生涯的な発達過程として捉えられるようになってきていることである。

1. 研究背景

近年、日本語教育研究・実践に関して、「キャリア」への注目が集まっている。『公益財団法人日本語教育学会理念体系—使命・学会像・全体目標・2015-2019年度事業計画』（公益財団法人日本語教育学会 2017）に示された、日本語教育に関わる社会的研究課題の一つに「多様なキャリア形成のための日本語教育内容の体系的再編成」が、社会的課題の一つに「キャリアとことば：外国人の就労を支援するための『日本語教育』」が挙げられている。これを受け、2020年には学会誌『日本語教育』175号にて「日本語が拓く多様なキャリア形成」についての特集が組まれている。また、2023年4月発行の184号の特集テーマは「ともに学び未来を描くキャリア形成の現場」である。

「キャリア」という概念は、心理学を中心に個人の生き方や発達に関連する概念として長らく議論されており、昨今の日本語教育におけるキャリア研究・実践の発展においてもその影響が大きい。しかし、個人の内的変容としてのキャリア形成が言語教育とどのように関わるのかという議論は、管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では今後の日本語教育とキャリアを結ぶ研究のあり方を考えていくために、日本語教育分野において、「キャリア」をキーワードとする文献調査を実施した。その結果を踏まえ、日本語教育分野におけるキャリア研究が誰を対象に、何を論じて来たのかを考察し、今後の日本語教育とキャリアを結ぶ理論の構築を目指す一助とすることを目的とする。

2. 調査方法

調査手順は、以下の通りである。

まず、NII 学術情報ナビゲータ (CiNii) を用い、「日本語教育」及び「キャリア」をキーワードとする文献検索¹⁾を行った。その結果、学術研究に相当しないもの (書評・目次等)、結果が重複して表れたもの、キーワードが所属先・掲載雑誌名の上にヒットしたものを除き、計124本の対象文献を抽出した。次に、これらの対象文献を年代別に整理し、研究対象・キーワード・研究カテゴリーなどの情報を一覧化した (表1)。

上記の手順を経て作成された文献リストを分析対象として、日本語教育分野におけるキャリアが、誰を対象に、何を論じるものであったかを分析した。以下、「研究動向」「研究対象」「研究テーマ」の3項目について分析した結果と考察を示す。

表1 文献リストの一部

著者	出版年	表題	雑誌名	検索キーワード	対象 (学習者/教師/生活者等)	内容	カテゴリー	サーチエンジン	備考
96 尾河玄也、加藤林太郎	2021	日本語教師のキャリア形成に関する一考察 - 現職教師の経験したやりがいと失敗から	拓殖大学日本語教育研究 6, 57-74	日本語教師、職業経歴、ライフストーリー、やりがい、失敗	中堅日本語教師	半構造化インタビュー/ライフストーリー研究	日本語教師のキャリア形成	CiNii	日本語教師×キャリアと重複
97 鈴木加奈子、増田麻里、野口直子	2021	キャリア教育と日本語教育の融合による可能性を考える 「SDP共通プログラム」と日本語科目の連携の試みから	静岡大学国際連携推進機構紀要3, 29-46	キャリア教育と日本語教育の融合、留学生就職促進プログラム、伴走型支援	留学生	留学生就職促進プログラム、キャリア教育プログラム、キャリア教育プログラムと日本語教育プログラムの連携事例報告	実践報告、留学生の就職支援	CiNii	
98 堀田栄一	2021	日本語教育学を専攻した中国人民大学院生のキャリア観と職業選択 - 大学院修了後、日本語教師以外の道に進んだのは何故か -	APU言語研究論叢 6, 96-98	中国人民大学院生、キャリア選択、日本語教師、非母語話者教師 TEA	大学院で日本語教育学を専攻した中国人留学生	半構造化インタビュー/TEA/中国人民大学院生1人	留学生のキャリア観	CiNii J-STAGE	日本語教師×キャリアと重複 同じ論文が2件ヒット
99 佐藤幸代	2021	留学生のキャリア形成支援・就職支援をめぐる研究の動向と主要論点	名古屋高等教育研究21, 227-246	オンライン授業、ICT、キャリア日本語	留学生 and (就職 or キャリア) で検索した論文	留学生のキャリア形成支援、就職支援の動向/レビュー論文	留学生のキャリア支援、レビュー論文	CiNii	
100 岩本 雄志	2021	上級キャリア日本語クラスにおけるオンライン授業の実践	日本語教育方法研究会誌27(1), 102-103	オンライン授業、ICT、キャリア日本語	留学生	アンケート調査 (受講生)	授業研究 (学生アンケート調査)	CiNii J-STAGE	
101 小柴 裕子、橋岡 正蔵	2021	オンライン授業における留学生のキャリア支援 - 卒業生のインタビュー調査によるロールモデルを通して -	日本語教育研究会誌27(1), 12-13	留学生、キャリア支援、動画制作、オンデマンド、KNCode3	留学生	オンデマンド授業 (留学生のキャリア支援を目的とした授業「ライフデザイン」) の実践報告	実践報告、留学生のキャリア支援	CiNii J-STAGE	

3. 結果と考察

3.1 研究動向

日本語教育分野において「キャリア」という用語が継続的に見られるようになったのは2004年以降であることが明らかになった (図1)。2004年から2015年までの期間は「日本語教育」と「キャリア」をキーワードとする研究は年5本程度と少ないものの、2016年と2018年に10本、2019年に15本となり、以降対象文献数は増加傾向にある。このことから、2004年と、2016年もしくは2018年という時期が転機になっていると言える。社会状況の変化が文献数に表れるのには一定の時間を要すると考えられるが、その点に留意しながら、以下、上記の時期の日本語教育を取り巻く社会状況を考えてみたい。

2004年は、2000年代に入り世界経済のグローバル化に伴う国際的な人材育成に注目が集まり始めた時期である。2003年には、1983年に目標として掲げた「留学生10万人計画」が達成されているが、留学生の受け入れ体制の問題が表面化し、その年の12月の「中央教育審議会答申」におい

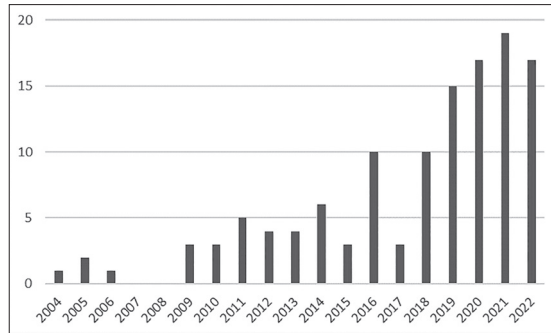


図1 年代別文献数（2004年から2022年まで）

ては、留学生の受入れに当たっては、量の拡大だけでなく、質の確保のための取組みを強化する必要があるという報告がなされている。このように留学生の質にも焦点が当たってきたことと関連し、日本語教育がその後の進路や就職等と関わることが増えたのではないかと考えられる。しかし、2015年頃までは研究の数はさほど多いとは言えず、注目が集まっていたというほどではない。

数的な転換期となっている2016年もしくは2018年という時期は、日本語学習者の多様化が2000年代よりも進んだ時期である。2008年のリーマンショック、2010年の尖閣諸島問題による日中関係の悪化、2011年の東日本大震災等の影響を受け、在住外国人の数はしばらく減少傾向にあったが、2013年以降、コロナウイルスの感染が拡大する2019年までは右肩上がりに増加していく（出入国在留管理庁 2023）。

留学生については、2007年から2012年までの「アジア人財資金構想」、そして2008年の「留学生30万人計画」以降、「卒業後に就職し、日本に定住する」というキャリアパスが描かれたが、それが現実味を帯びてきた時期が2016年もしくは2018年であると言える。そして、日本語教育においては、アカデミックジャパニーズを基礎とした、就職支援のための日本語教育としてビジネス日本語教育が位置付けられ、それが従来からのキャリア教育と接続していく（堀井 2018）。

また、2008年の介護士・看護福祉士受け入れ開始、2009年の在留資格「技能実習」や2016年の在留資格「介護」の創設等によって、日本語教育におけるキャリアの研究対象の幅も広がりを見せている。前述の通り、学会誌『日本語教育』175号（日本語教育学会 2020）で「多様なキャリア形成」という言葉が用いられていることからこのことを窺い知ることができる。この背景には、日本国内において少子高齢化が進み、将来的な生産人口の減少が予測される中で、上述した外国人の受け入れ推進が進められたことが挙げられる。それに伴い、国の外国人受け入れ政策が大きく転換され、2019年の日本語教育推進法等の制定など、日本語教育分野にも多大な影響を及ぼし、現在に至っていると考えられる。

この流れの中で、2017年以降、高度外国人材の日本への定着を促進する、「留学生就職促進プログラム」や「留学生就職促進教育プログラム認定制度」などの文部科学省委託事業も展開されている²⁾。留学から就労、そして定着へというキャリアパスが強く推奨されるようになり、そのことが研究対象として日本語学習者のキャリアへの注目を喚起させたのではないかと考えられる。

また、この時期の傾向として、日本語学習者だけでなく、日本語教師やその周辺の人々のキャ

リアに関する研究が増えている。上記の日本語教育推進法等の制定とも関わるが、日本語教育の充実が叫ばれるようになり、質の高い日本語教育人材³⁾の養成にも目が向けられる。2000年の「日本語教育のための教員養成について（平成12年教育内容）」が大幅に見直され、2019年には「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版」がまとめられ、その中で日本語教育人材のキャリアパスが具体的に明示されている。また、これに続く『潜在的な』日本語教師」（文化庁 2022）や「登録日本語教員」（文化庁 2023）という国の政策が、従来から存在する日本語教師の多様性や待遇改善の議論とも相まって注目を集めているものと考えられる。

3.2 研究対象

研究の対象を概観すると、日本語学習者（64.7%）、日本語教師（実習生を含む）（21.8%）とその他（教材・プログラム開発等の日本語教育におけるキャリア教育の課題）（16.9%）と大きく3つに分けられる（図2）。最も多いのは日本国内の教育機関に在籍する留学生を対象とした研究であり、学習者対象の6割、対象者全体でも4割を占める。留学生の場合、外国人留学生全般を扱うものが多いが、所属（日本語学校や大学、大学でも交換留学や学部、大学院等）、専門（文系、理系等）、国籍（中国人、韓国人等）のように属性で限定する研究も見られた。留学生以外の学習者は、元留学生や就労者、技能実習生、年少者、生活者としての外国人、海外教育機関で日本語を学ぶ学習者など多様である。また、学習者を日本語非母語話者に限らず、日本人学生や教職員を含める研究や、その教育機関に在籍する全学生を対象とする研究も見られた。

これらの年代別の数の推移を見ると、全体的に数が増えているのに伴い、対象も多様化していることがわかる（図3）。3.3で述べる研究テーマと関わるが、例えば三代（2014）では、留学生2人にライフストーリー・インタビューを行い、セカンドキャリア支援と結び付けた日本語教育の可能性を述べている。留学生の就職支援の日本語教育が「ビジネス日本語教育」のようなスキルトレーニングとしての側面を持った教育に加え、「キャリア日本語教育」のように、その人のキャリア形成、つまり就職というキャリア形成の一場面に限らず、人生全体を視野に入れたライフキャリアを支援する教育も見られる。このように、留学生の就職支援のための日本語教育が日本語学習者のキャリア形成支援と捉えられるようになってきたことから、研究対象の幅が広がったと考えられる。さらには、3.1でも触れた通り、学習者のみでなく近年は日本語教師のキャリア形成を扱う研究が増えていることが数字上も見取れる。但し、日本語教師のキャリアに関する研究の場合にも、職業・職歴・職能としてのワークキャリアと人生における仕事の位置付けとしての

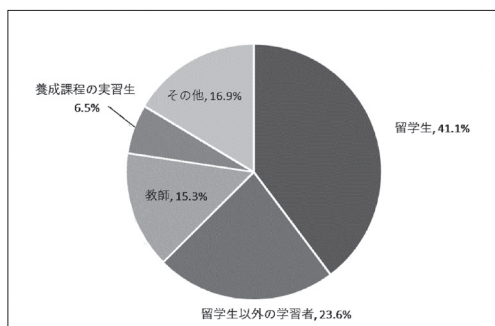


図2 研究対象者

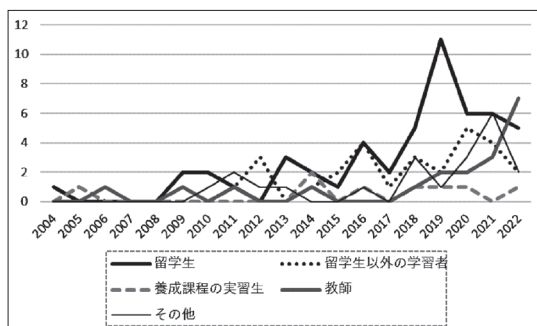


図3 年代別研究対象者

ライフキャリアの意味合いが混在していることには注意する必要がある。つまり、前者は「教師の成長」という文脈の中でキャリアという用語が使われるのに対し、後者は「教師と人生（ライフ）」という文脈の中で扱われる。両者を完全に切り分けることは難しいが、どのような視点で「キャリア」という用語が用いられているかについては慎重に見ていく必要がある。

3.3 研究テーマ

研究テーマは、その傾向から①「就職及びキャリア支援のあり方」②「日本語授業におけるキャリア教育実践のあり方」③「キャリアに焦点を当てた日本語学習者研究」④「キャリアに焦点を当てた日本語教師研究」の4つに大別された。以下、カテゴリーごとに2つの文献を挙げ、説明を加える。

①就職及びキャリア支援のあり方

- 1) 古賀万紀子 (2018) 「外国人大学生に対する就職支援の文脈における日本語教育の課題：「ビジネス日本語教育」から「キャリア日本語教育」へ」
- 2) 塚田麻美 (2021) 「日本語学校におけるキャリア支援の実態と可能性：支援経験のある日本語教師の語りの分析」

このカテゴリーは、従来行われているビジネス日本語教育や留学生のキャリア支援というものを、キャリア教育やキャリア・カウンセリングの枠組みから批判的に捉え、新たな教育・支援のあり方を提案したものである。古賀 (2018) は海外の大学で日本語を学ぶ外国人大学生を対象にした実践から、キャリア教育は特定の活動や指導方法に限定されるものではないとして、「キャリア日本語」を提案する。塚田 (2021) は、日本語学校で留学生の進路指導に関わった経験がある日本語教師の語りをヘルピングというキャリア・カウンセリングのモデルを分析的枠組みとして分析し、ヘルピングを取り入れたキャリア支援の可能性を示している。このような研究は、キャリア研究の知見を日本語教育に取り入れている点で、今後の日本語教育とキャリアの関わりを考える上で重要な研究だと考えられる。

②日本語授業におけるキャリア教育実践のあり方

- 1) 宮崎聡子 (2019) 「キャリア支援課との協働による日本語授業：2018年度「キャリア日本語」の実践より」
- 2) 黄均鈞・山本晋也 (2020) 「中国の大学日本語専攻者のキャリア形成を考える授業実践——貫性のあるキャリア・ストーリーの構築を目指して」

このカテゴリーは、特に教室実践に焦点化したものである。宮崎 (2019) は、日本語教師が大学のキャリア支援課と協働して授業を組み立てるという役割分担を伴った就職支援について述べている。黄・山本 (2020) は、中国の大学で行われた日本語教育実践にキャリア研究の知見を取り入れ、将来設計につながるキャリアの物語を、レポートという形で表現することをめざすものである。なお、①で挙げた古賀 (2018) は、就活対策、自己分析、能力育成、自己構成という4つの枠組みを提示しているが、この枠組みは実践を捉えるときに役に立つと考えられる。

③キャリアに焦点を当てた日本語学習者研究

- 1) 李奎台 (2016) 「ある成人韓国人の対人関係に関する価値観の変容：振り返りインタビューによる事例研究」
- 2) 近藤行人・西坂祥平 (2021) 「理系の外国人研究者が向き合う日本語に関する経験—日本でアカデミックキャリアを積む研究者のストーリー—」

このカテゴリーは、日本語学習者へのインタビュー調査等を通して、キャリア形成をめぐる個人の経験や価値観の変容などを長期的な視点から捉えようとするものである。李 (2018) は、日本での留学を経て日本企業で働く外国人社員の対人関係をめぐる経験の語りから、就職前教育の見直しについて言及している。また、近藤・西坂 (2021) は、日本の大学に勤める外国人研究者の語りから、彼らを取り巻く言説・社会構造に言及している。これらは日本語学習者のキャリア形成をめぐる現在の構造の問題点を指摘し、教育や支援のあり方について提案を行う研究である。

④キャリアに焦点を当てた日本語教師研究

- 1) 布施悠子 (2019) 「初任日本語教師キャリア形成過程の可視化の試み—複線径路・等至性アプローチを用いて—」
- 2) 西野藍・坪根由香里・八田直美 (2020) 「タイの中等日本語教員Aのキャリア形成過程—複線径路・等至性アプローチ (TEA) による分析—」

③が日本語学習者に焦点化しているのに対して、④は現役の日本語教師、日本語教師養成講座在籍者、以前教師をしていた人々等に焦点を当て、日本語教師養成や研修のあり方に寄与する研究である。布施 (2019) は前職を退職して養成講座に入学し、日本語教師の職に就いた者を対象に、そのキャリア形成過程を明らかにし、教師のキャリア形成支援への提言を行っている。このような教師のキャリアに焦点を当てた研究は日本人日本語教師を対象とした研究が多いが、西野他 (2020) のように海外の日本語教育に従事するノンネイティブ教師を対象にし、そのキャリア形成から公的支援のあり方を模索するものも見受けられる。

これら4つのカテゴリーでは、研究対象の結果とも関わるが、②と③ (日本語授業・学習者研究) が相当数を占めていた。なお、近年では、①や② (就職及びキャリア支援、日本語授業) と関連し、古賀 (2018)・宮崎 (2019) のように、日本語教育とキャリア教育を融合させる「キャリア日本語」のような科目が見られるようになっている。この「キャリア日本語」という言葉は、近年、大学や日本語学校等の授業科目名としても散見されるようになったが、「キャリア」の定義同様に、機関や教員によって授業内容や対象が大きく異なる点には注意が必要である。

また、③や④ (学習者研究、教師研究) に関して、このカテゴリーに含まれる研究の多くがライフストーリーや複線径路等至性アプローチ (安田・サトウ 2022) のような質的研究手法を採用しているという点も特徴的である。これには近年の日本語教育分野における質的研究への関心の高まりも一つの要因であると考えられるが、個別性や生涯発達の視点を意味的に含んでいる「キャリア」と、このようなプロセスを扱う質的研究手法との相性が良いということも挙げられるのではないだろうか。

一方で、③や④ (学習者研究、教師研究) のカテゴリーにおいて、量的なアプローチからの研究はほぼ見られなかった。これについて、日本語教育以外の分野のキャリア研究においては量的

研究による十分な積み上げがなされている。質的研究と量的研究が相補的なものである（やまだ 2013）ことを踏まえると、日本語教育分野のキャリア研究においても量的なアプローチからの研究が必要であると考えられる。

4. 総合考察

「日本語教育」と「キャリア」をキーワードとした研究動向、および研究対象やテーマの変遷からは、2つのことが言える。一つは、日本語学習者の多様化と並行して、「キャリア」を扱う研究においてもその研究対象が多様化、細分化されていることである。また、多様化・細分化の傾向と同時に、キャリアに焦点を当てた学習者研究・教師研究においては、個のキャリアへの注目も見られる。つまり、一人または少人数に研究対象を絞り、彼らのキャリアがどのように形成されているか、そこにどのような社会的、文化的な要因が関わっているかを、丁寧に分析していくような研究がされている。これには、2000年代以降の、教育面における学習者一人ひとりの個別性への注目や、研究面における質的アプローチの浸透等が影響を与えていると考えて良いだろう。

もう一つは、「キャリア」の捉え方が、個人の将来選択に関わる資質や能力、特に日本語能力の育成に関わるものから、個人の生涯的な発達過程として捉えられるようになってきていることである。特に、2016年以前の研究動向において、キャリア形成に関わる日本語教育は、「ビジネス日本語教育」を通じて学習者の日本での就労を支援するという立場が主であった。そこでは、キャリア形成を下支えするものとして、就労現場で必要となる言語の習得を促す役割を担うという認識が強かった。この傾向は今も主流と呼べるかもしれないが、このような研究に加えて、近年では、「キャリア日本語教育」という言葉からもわかるように、日本語ということばの学び自体がライフキャリアを含めたキャリア形成と深く関わるものであるという考え方も見られるようになってきている。これには、湯（2011）が指摘するように、「ビジネス日本語教育はあくまでもビジネス領域の日本語コミュニケーション能力を培うことによって、留学生のキャリアを高めるものであり、キャリア教育そのものではない」（p.71）という考え方が背景にある。そのような考え方に加えて、1990年代以降のナラティブ、つまり物語による認識論、方法論の転換も大きく影響していると考えられる。つまり、「物語ること」が個人のアイデンティティ形成と繋がるという考え方で、この点で言語教育とキャリア、特にライフキャリアという視点とが深く響き合っていると考えることができる。

なお、このような研究の流れはキャリア研究全般とも概ね一致している。1980年代以降、社会の安定性が揺らぐ中で、個人がキャリアを組織に委ねるような構造が崩れ、キャリアの主体を個人に置くキャリア観に注目が集まっていく。その中で、社会構成主義の影響等も受けながら、ナラティブへの関心が高まり、コ克蘭のナラティブ・アプローチ（Cochran 1997/2016）やサビカスのキャリア構築理論（Savickas 2011/2015）に代表される「コンストラクション系のキャリア理論⁴⁾」（下村 2015）が1990年代以降、展開されていく。

すでに見てきたように、日本語教育分野でのキャリア研究が展開されていくのは2000年代に入ってからだということを考えると、キャリア研究におけるナラティブ・アプローチが広がり始めていた時期とほぼ重なっており、ナラティブへの関心が個のキャリアに注目した研究の広がり

に大きく貢献しているものと考えられる。その一方で、キャリア研究は、パーソンズの職業選択理論（Parsons 1909）やスーパーのキャリア発達理論（Super 1980）のような、膨大なカウンセリング現場の知見の蓄積の上に成り立っている（渡辺 2018）のに対して、日本語教育分野においてはそこに十分な蓄積がないままに進められていることは否めない。研究手法において、どのようなアプローチが適しているかは研究目的にもよるため、甲乙をつけるべきものではないが、「キャリア」という複雑な現象を捉えていくには、研究の幅の広がりについて検討していくことも重要であろう。

5. まとめと今後の課題

本調査からは、日本語教育分野において、キャリアに関わる研究が質、量ともに変化していることが確認できた。その中では、職業選択や就職支援のようなワークキャリアのみならず、個人の人生と関わるライフキャリアに関する研究も行われている。これは日本語教育が言語習得のみを目指すものではなく、個人の人生にも深く関わるものであるとする、日本語教育全体のパラダイムシフトとも関連していると考えられよう。

このようなキャリアに関する研究への関心の高まりの背景には、少子高齢化が進む中での外国人受け入れ等の社会状況の変化や、それに伴う外国人留学生の定住化に向けた政策等が影響しているものと考えられる。その中で、個人を取り巻く環境や社会制度の変化を受け、広く個人の内面的なキャリアを捉えようとする研究や、キャリア形成支援の在り方等に言及する研究が増えつつある。一方で、多くの日本語教育に関する研究において、「キャリア」は一般的な用語として用いられており、「キャリアとは何か」「なぜ日本語教育分野の研究でキャリアについて論じる必要があるのか」などについては十分に検討されていない。但し、古賀（2018）や黄・山本（2020）のように、日本語教育研究として「キャリア」を取り上げることをしっかりと咀嚼した研究も近年増えてきており、理論的な基盤が整いつつある。今後は日本語教育研究とキャリア研究とを結びつけた議論がより活発化していくものと考えられる。

近年のキャリア研究において、キャリア構築理論を提唱したSavickas（2015）は、急激な社会環境の変化の中で自己を見失わないためにも、他者との関わりの中でキャリアを構築していく必要があると述べている。研究対象・テーマともに多様化しつつある日本語教育分野におけるキャリア研究においては、より広い社会との繋がりの中で個人のキャリアを捉える研究が求められる。そのためにも、心理学や社会学等の他分野におけるキャリア研究の成果を参照しつつ、キャリアと日本語教育がいかに関わるのかについて、今後、検討していく必要がある。なお、本研究では「日本語教育」「キャリア」をキーワードとする文献調査を行ったが、日本語教師のキャリアを取り扱った研究には「日本語教育」という用語が出現せず、検索にヒットしない文献も存在した（例えば、佐藤・三代（2019）、若杉（2019））。今後、調査を拡大していく中での課題としたい。

付記

本稿は2022年9月17～18日に実施されたアジア人材環流学会ハノイ国際セミナー 2022の研究発表（ポスター発表）『日本語教育において「キャリア」はどのように扱われてきたか』の内容を加筆修正したものである。なお、本研究はJSPS科研費基盤研究C「日本語教育人材の非直線

型キャリア形成に関する基礎研究」22K00635（代表：松尾憲暁）の成果の一部である。

注

- 1 この文献検索は2023年3月27日に実施した。なお、本研究では「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE)でも同様の検索を実施したが、結果がCiNiiと重複しているため、本稿ではCiNiiの結果として記述する。
- 2 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1370919.htm
- 3 文化庁（2019）は、日本語教師、日本語教育コーディネーター、日本語学習支援者の総称として日本語教育人材という名称を用いている。
- 4 下村（2015）は、何らかの意味でコンストラクション（構築、構成）をキーワードとしている理論を「コンストラクション系のキャリア理論」と総称している（p.10）。その理由として、これらの理論群で用いられる用語が、日本語では、社会構成主義、社会構築主義、構成主義、構築主義など、様々な訳語が当てられていることを挙げている。

参考文献

- 黄均鈞・山本晋也（2020）「中国の大学日本語専攻者のキャリア形成を考える授業実践——貫性のあるキャリア・ストーリーの構築を目指して」『一橋日本語教育研究』8, pp.25-38.
- 古賀万紀子（2018）「外国人大学生に対する就職支援の文脈における日本語教育の課題——「ビジネス日本語教育」から「キャリア日本語教育」へ」『早稲田日本語教育学』25, pp.21-40.
- Cochran, L., (1997) *Career counseling: A narrative approach*. Thousand Oaks, CA: Sage. [コ克蘭, ラリー., 宮城まり子・松野義夫（訳）（2016）『ナラティブ・キャリアカウンセリング——「語り」が未来を創る』生産性出版]
- 近藤行人・西坂祥平（2021）「理系の外国人研究者が向き合う日本語に関する経験——日本でアカデミックキャリアを積む研究者のストーリー」『日本語教育』179, pp.31-46.
- 佐藤正則、三代純平（2019）「「職業として確立していない」言説に対抗する語り——1980年代後半にキャリアを始めた日本語学校教師のライフストーリーから」『語りの地平——ライフストーリー研究』4, pp.48-68.
- Savickas, M. L., (2011) *Career counseling*. Washington DC: American Psychological Association. (サビカス, M. L., 日本キャリア開発研究センター（監訳）（2015）『サビカス キャリア・カウンセリング理論——〈自己構成〉によるライフデザインアプローチ』福村出版)
- 下村英雄（2015）「コンストラクション系のキャリア理論の根底に流れる問題意識と思想」渡部昌平（編）『社会構成主義キャリア・カウンセリングの理論と実践——ナラティブ、質的アセスメントの活用』福村出版, pp.10-43.
- 出入国在留管理庁（2023）『令和4年末現在における在留外国人数について』
 〈<https://www.moj.go.jp/isa/content/001393064.pdf>〉（2023年4月30日取得）
- 塚田麻美（2021）「日本語学校におけるキャリア支援の実態と可能性——支援経験のある日本語教師の語りの分析」『小出記念日本語教育研究会論文集』29, pp.205-214.
- 湯謹（2011）「ビジネス日本語教育の試み：カリキュラム編成をめぐる」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』15, pp.69-75.

- 西野藍・坪根由香里・八田直美（2020）「タイの中等日本語教員Aのキャリア形成過程—複線径路・等至性アプローチ（TEA）による分析—」『ICU日本語教育研究』16, pp.3-19.
- 日本語教育学会（2017）『公益社団法人日本語教育学会理念体系—使命・学会像・全体目標・2015-2019年度事業計画』
- 日本語教育学会（2020）『日本語教育』175号
- 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議（2000）『日本語教育のための教員養成について』
- 布施悠子（2019）「初任日本語教師キャリア形成過程の可視化の試み—複線径路・等至性アプローチを用いて—」『日本語教育』173号, pp.46-60.
- 文化庁（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』
- 文化庁（2022）『令和5年度概算要求の概要』〈https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/yosan/pdf/93758701_01.pdf〉（2023年4月10日取得）
- 文化庁（2023）『日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律案（仮称）の検討状況について』〈https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/nihongo/nihongo_117/pdf/93833701_06.pdf〉（2023年4月10日取得）
- 堀井恵子（2018）「『ビジネス日本語教育研究の目指すもの』再考—ビジネス日本語研究会の歩みとこれから—」『BJ ジャーナル』創刊号, pp.3-15.
- 宮崎聡子（2019）「キャリア支援課との協働による日本語授業—2018年度「キャリア日本語」の実践より」『長崎外大論集』23, pp.85-97.
- 三代純平（2014）「セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語—スポーツ留学生のライフストーリーから—」『言語文化教育研究』12, pp.221-240.
- 安田裕子・サトウタツヤ（編）（2022）『TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述—保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究』誠信書房
- やまだようこ（2013）「質的心理学の核心」やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也（編）『質的心理学ハンドブック』新曜社, pp.4-23.
- 李奎台（2016）「ある成人韓国人の対人関係に関する価値観の変容—振り返りインタビューによる事例研究」『日本語教育実践研究』3, pp.137-147.
- 若杉美穂（2019）「日本語教師のキャリア形成における大学院進学の意味づけ」日本語日本文学論叢』14, pp.49-62.
- 渡辺三枝子（編）（2018）『新版 キャリアの心理学〔第2版〕—キャリア支援への発達のアプローチ—』ナカニシヤ出版
- Parsons, F., (1909) *Choosing a vocation*. Boston, MA: Houghton-Mifflin.
- Super, D. E., (1980) A life-span approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16 (3), 282-298.

年 報（2022年 4 月～2023年 3 月）

1. 日本語研修コース.....	33
2. 日本語・日本文化研修コース.....	46
3. 日本社会文化プログラム.....	48
4. 全学共通教育.....	50
5. 年間行事.....	51
6. 交流ラウンジ.....	58

資 料

岐阜大学留学生数.....	60
---------------	----

1. 日本語研修コース

日本語研修コースは、留学生の学習環境やレベルに合わせて選択できるよう、「集中コース」、「一般コース」、「生活日本語コース」の3つのコースが提供されている。集中コースは、1学期間、毎日の授業を必修とし、集中的に日本語を学ぶコースである。日本語を初めて勉強する学習者（未習者）、日本語を勉強したことがある学習者（既習者）それぞれのレベルに合わせたクラスが設定されている。未習者はしっかり日本語の基礎を学ぶことができ、既習者はさらなる日本語力の向上を目指して様々な技能を身につける。一般コースは、既習者のうち、まとまった日本語学習の時間が取れない学生向けに、提供される科目を選択して学ぶコースとなっている。生活日本語コースは、未習者を対象とし、日本語に親しむきっかけの授業となる、日本語に慣れるための超入門クラスとなっている。

集中コースは初級（A）、初中級（B）、中級（C）の3レベル、一般コースは初級（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級クラス（D）の4レベルに分けたクラスを提供する。これに独立したコースとして、ゼロ初級向けの生活日本語（JDL）クラスがあり、日本語研修コースが提供するクラスは、計8クラスとなっている。

1.1 2022年度前期（2022年4月～9月）

今年度も、前期は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、コースやクラス設定に臨機応変な対応が必要であった。来日ができない・遅れる学生を考慮し、例年よりも授業の開始を遅らせ、海外からのオンライン参加もできるように、ハイブリッド授業中心の授業体制を整えた。

学内公募による申請者は49名（教員研修生3名、研究生11名、大学院修士課程20名、大学院博士課程10名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）5名）であった。コース別の申請者数は、集中コース8名、一般コース30名、生活日本語コース11名であった。うち、コース開始前に数名の辞退者があり、日本語・日本文化教育センター所属の交換留学生（日本社会文化プログラム学生）4名も含めた計49名が受講することとなった。ガイダンス・プレイスメントテストは、対面とオンラインとにわけて行われた。オンラインでのプレイスメントテストは、基礎力をはかるもののみを実施し、その結果を踏まえてオンラインでの面接により、各受講希望者のクラスを決定することにした。

以下に本学期のスケジュールと各クラスの時間割及び授業報告をまとめる。

1.1.1 集中・一般コース（第52期）

4月14日（木）ガイダンス・プレースメントテスト

4月18日（月）授業開始

7月29日（金）授業終了

初中級（B）、中級（C）クラスに関しては、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供することとなった。集中コースとなる学生は10科目以上を必修とし、その他の学生は選択制として、履修届けを提出してもらった。

【集中Aクラス】

時間割

	月	火	水	木	金
1			総合日本語A 〔廣瀬〕	総合日本語A 〔三輪〕	総合日本語A 〔河田〕
2	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔石井〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔秋山〕	総合日本語A 〔田辺〕

授業報告（Aクラス担任：吉成）

Aクラスは集中コース希望者の未習者を対象としたクラスである。今学期はオンライン授業の可能性も鑑み、週8コマの授業を提供することにした。受講者は4名（博士課程2名、修士課程1名、国費研究生1名）で、国籍はインドネシア（2）、ケニア、バングラデシュであった。2名が来日できず、海外からの参加となるため、教室に来る2名を含め、ハイブリッド授業を実施した。オンライン授業を考慮したとはいえ、ケニアから授業に参加していた受講者には、時差があり大変だったと思う。ハイブリッドの難しさはあったが、どの学生も真面目に授業に取り組んでいた。週8コマの授業だったため、『みんなの日本語I』のみを学習することにした。ゆっくり授業がすすめられたことは、この難しい環境で学ぶ受講者にとって、ちょうどよかったのかもしれない。

学期半ばを過ぎて、オンライン参加だった2名が来日し、対面授業のみでできるようになった。やはり対面授業ではペア練習がスムーズで、会話練習も活発に行えた。またオンラインでは文字の指導が難しかったが、対面授業では書く練習のフィードバックも詳細に行うことができた。学生からの質問も多くできるようになり、今学期も対面授業の良さを再認識する学期となった。

〔一般A 2 クラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	一般A 2 〔松尾〕	一般A 2 〔中村〕		一般A 2 〔河田〕	一般A 2 〔秋山〕

授業報告（A 2 クラス担任：松尾）

一般A 2 クラスは、初級レベルのクラスである。受講者は4名（修士課程2名、博士課程2名）で、国籍はインドネシア、ベトナム、ベナン、ミャンマーであった。うち先学期に生活日本語クラスを受講した学生が3名受講した。一般クラスは、専門の授業などで多くの学習時間が取れない学生が多いため、一般クラスの教科書として活用形のルールが繰り返し何度も出てくる『まるごと初級1 A 2 りかい』（国際交流基金編著）を使用した。今学期は週4コマで開講した。

今学期はコロナ禍の影響もあってか、例年に比べると少人数での開講となったが、その分、一人一人の特性に目を配ることができ、手厚い学習支援を行うことができた。特に、人数が多いと授業内で十分なフィードバックを行うことが難しい発音や短文作成のような活動について、今学期は細やかな指導を行うことができたと思われる。

また、学生間の関係性は良く、互いに協力し合いながら学習を進め、着実に日本語の運用能力を向上させていた。一方で、4名のうちの1名が専門の授業との関係で学習の継続が困難となり、1名が研究と関わる海外出張で長期に欠席することになったため、学期後半はペアやグループでの活動を行うのが難しい状況が続いた。

A 2 クラスでは、例年Bクラスに進みたい学生が一定数いるが、試験形式の問題に慣れていないこともあり、円滑な接続に繋がっていなかった。そのため、今学期は、毎週、『日本語能力試験N 5 直前対策ドリル&模試 文字・語彙・文法』（森本智子・高橋尚子・松本知恵著）の1回分の問題を渡すことにした。任意の課題ではあったが、特段の事情がない限り、学期の最後まで受講した学生はきちんと提出していた。

〔集中・一般Bクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B 〔小寺〕	総合日本語B 〔橋本〕	総合日本語B 〔松尾〕	総合日本語B 〔野原〕	総合日本語B 〔橋本〕
2	語彙読解B 〔野原〕	口頭表現B C 〔橋本〕	文章表現B 〔松尾〕	口頭表現B 〔河田〕	聴解演習B 〔石井〕
3				漢字B C 〔秋山〕	

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは初中級レベルのクラスである。集中コースに3名（研究生2名（中国2）、日本社会文化プログラム学生1名（フランス））、一般コースに8名（教員研修生2名（インド、インドネシア）、研究生1名（中国）、修士課程3名（中国、ベトナム、ミャンマー））が受講した。うち入国ができない学生が5名おり、今学期はオンラインを併用したハイブリッド形式で授業を行うことにした。学期途中で入国できた学生が徐々に増え、学期終わりにはほぼ全員が教室で授業を受けることができた。

本来であれば集中コース受講者は全10コマ必修、一般コース受講者は5コマから選択という受講の仕方であったが、今期は集中コース受講者が少なく、またコロナ禍という状況を考慮し、一般コースの学生は10コマから選択で受講できることにした。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで学んだ初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。今期の総合Bクラスは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。

今期のBクラスは、コロナ禍の中、積極的に授業に参加していた。通常であれば一般コース受講者は受講コマは5コマが上限であったが、今期はそれ以上の授業を受講することができ、実際5コマ以上を受講した学生は4名いた。ハイブリッド形式での授業となり、難しい面もあったが、学生たちは真面目に受講してくれた。

〔集中・一般Cクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	日本語演習C 〔吉成〕	総合日本語C 〔吉成〕	総合日本語C 〔小寺〕	文章表現C 〔吉成〕	総合日本語C 〔石井〕
2	文法C 〔小寺〕	口頭表現BC 〔橋本〕	文章表現B 〔松尾〕	総合日本語C 〔野原〕	文章理解C 〔秋山〕
3	口頭表現C 〔松尾〕			漢字BC 〔秋山〕	

授業報告（Cクラス担任：吉成）

本学は集中コースに該当する受講者は日本社会文化プログラム学生1名（フランス）と研究生1名（中国）だった。しかし、入試準備の忙しさもあり、希望により後者1名は一般コースに変更し、参加できる科目だけ受講することになった。その他の一般コースの受講者は対面参加が修士課程の2名（インドネシア、ネパール）、オンライン参加が修士課程の3名（マレーシア、中国、ベトナム）であった。対面参加の1名は個人的事情により学期途中で辞めることになった。オンライン参加で始まった3名のうち2名は5月半ばには来日できたが、1名は結局、学期中に来日することができず、オンライン参加のままであった。

一般コースの受講者に対して、対面参加ができる者にはすべての科目を、オンライン参加の者には4科目（文法C、口頭表現C、文章表現C、文章理解C）を開講することにした。その中から履修科目を学生が選ぶのだが、今学期も研究の忙しさからか、学期最後まで授業に参加する人が少なかった。集中コースの学生が一人だけになる授業もあったが、しっかり勉強できてよかったという感想が聞けたのは幸いであった。今後は対面授業が進み、活発なクラス活動ができればと願う。

【一般Dクラス】

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [野原]	総合日本語D [石井]	総合日本語D [土谷]	総合日本語D [秋山]	口頭表現D [田辺]
2			聴解演習D [廣瀬]		
3		文章理解D [石井]			

授業報告（Dクラス担任：土谷）

総合D（週4コマ）、口頭表現D（週1コマ）、聴解演習D（同）、文章理解D（同）を提供した。学生は最小1コマから最大7コマまで、専門科目の受講状況に合わせて日本語科目を選択した。総合Dは対面授業のみだったが、他3科目は未来日学生がいればという条件でハイブリッド（対面＋オンライン）授業を実施した。学期途中に来日した学生も、希望すれば総合Dに参加可とした。日研究生には加えて文章表現D（週1コマ）も提供した。

今期のDクラス受講者は12名（社会文化プログラム学生1名、学内公募の研究生5名、同修士課程4名、同博士課程1名、大学間協定校からの交換留学生1名）で、学期当初から対面授業に参加できたのは5名、学期途中で来日しオンラインから対面になったのが5名、最後まで来日できなかったのは2名であった。国籍は韓国、スペイン、中国（9）、フランスであった。学期が終わるまでには全員教室に来られるようになって見込んでいたが、結局来日できなかった学生が2名いた。1名はビザの発給の遅れで学期後來日、1名は来日できる条件は整ったものの飛行機チケットが高いという自己都合で来日中止した。来日の意志を失った学生が受講し続けるという不可解な状況であった。

この12名の他に、先学期Dクラスを履修し終えたが来日できずオンラインで受講し続けた社会文化プログラム学生1名を、日研究生用の文章理解Dと口頭表現Dに特例的に参加可とした。当該学生は、学期途中で来日し、わずか数ヶ月ではあったが実地の日本留学を叶えることができた。

今期の学習状況は振るわなかったと言わざるを得ない。修士課程や博士課程の学生は、学期当初は日本語学習意欲が高いが、学期が進むと専門の研究が忙しくなり、授業外で日本語学習に割く時間はほぼなくなる。それは、予復習が求められる総合Dで特に顕著な影響が出る。そのような学生がいると、あまり真剣に勉強しなくていいという雰囲気がクラス全体に蔓延し、レベルが低下する。水は低きに流れることを痛感したが、来日後総合Dに参加し始めた学生たちが比較的熱心だったことを思うと、彼らが学期当初から教室で学

ぶ雰囲気醸し出していけば違った様相になったかもしれない。思わぬ新型コロナウイルスの余波であった。

1.1.2 生活日本語コース

4月18日（月）授業開始

7月29日（金）授業終了

生活日本語コース（JDL：Japanese for Daily Life）は、ゼロ初級（未習者）を対象としたクラスを提供している。

〔JDLクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
2		生活日本語 〔中村〕	生活日本語 〔小寺〕	生活日本語 〔橋本〕	生活日本語 〔河田〕

授業報告（JDLクラス担任：橋本）

生活日本語（JDL：Japanese for Daily Life）クラスは日本語未習者対象のクラスで、受講者は11名（修士課程5名（うち国費1）、博士課程5名（うち国費1）、研究生（国費）1名）である。国籍はミャンマー（2）、東ティモール（2）、バングラデシュ（2）、インドネシア、エジプト、ガーナ、マレーシア、中国であった。受講生が1名を除き入国できなかったため、今学期はオンラインを併用したハイブリッド形式で授業を行うことにした。学期途中で入国できた学生が徐々に増え、学期終わりには全員が教室で授業を受けることができた。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、JDLでは機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を組んでいる。このクラスは口頭表現中心に授業を進めるので、文字学習は必ずしも必要ではなく、また文字学習を負担と感じる学生もいると考え、教材にローマ字を併記している『まるごとA1りかい』を教科書として使用しているが、以前から文字学習への要望が多数あり、文字学習も行なっている。ハイブリッドでの授業は難しい面もあったが、受講生は熱心に授業に参加していた。

1.2 2022年度後期（2022年10月～2023年3月）

後期の日本語研修コースは、ガイダンス・プレイスメントテストを対面のみで実施することができ、授業も学期初めからどのクラスも対面授業のみで行うことができた。

学内公募による申請者は63名（教員研修生4名、研究生14名、大学院修士課程17名、大学院博士課程21名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）7名）であった。コース別の申請者数は、集中コース12名、一般コース28名、生活日本語コース23名であった。うち、コース開始前に数名の辞退者があり、日本語・日本文化教育センター所属の留学生（日本語・日本文化研修コース5名、センター所属の交換留学生（日本社会文化プログラム）2名）を含めた計66名が受講することとなった。学期途中でコースを変えたものや、途中で受講を辞めるものもいた。詳しくは各クラスの授業報告を参照されたい。

以下に本学期のスケジュールと各クラスの時間割及び授業報告をまとめる。

1.2.1 集中・一般コース（第53期）

10月13日（木）ガイダンス・プレイスメントテスト

10月17日（月）授業開始 12月24日（土）～1月5日（木）冬季休暇

2月10日（金）授業終了

初中級（B）、中級（C）クラスに関しては、集中・一般コースの区別なく、各クラスすべての科目を一般コースにも提供することとなった。集中コースとなる学生は10科目以上を必修とし、その他の学生は選択制として、履修届けを提出してもらった。

【集中Aクラス】

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A 〔松尾〕	総合日本語A 〔中村〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔三輪〕	総合日本語A 〔田辺〕
2	総合日本語A 〔石井〕	総合日本語A 〔吉成〕	総合日本語A 〔小寺〕	総合日本語A 〔秋山〕	総合日本語A 〔河田〕

授業報告（Aクラス担任：吉成）

今学期の受講者は4名（修士課程1名、教員研究生1名、研究生2名）で、国籍はインドネシア（2）、メキシコ、中国であった。学期当初はゼロ初級の6名でスタートしたが、

1 か月経たないうちに、授業についていけないとのことで、2 名が生活日本語コースに移動し、4 名となった。先学期はオンライン授業の可能性もあったため、週 8 コマの授業提供であったが、今学期は初めから対面授業のみで実施できる見込みだったこともあり、週 10 コマで『みんなの日本語Ⅰ』と、『みんなの日本語Ⅱ』の 37 課まで（テストは 35 課まで）を学ぶスケジュールで開講された。

オンライン授業では難しかった文字の指導やペア会話練習なども行うことができ、対面授業の良さを改めて実感した。しかし、その効果があったのかには疑問が残った。文型を使った会話練習など、その場では活発に活動できても、しばらくすると忘れていることが多々あり、学期最後の会話テストでも、簡単なインタビューにも答えられない人が多かった。あまり日本語が身につかなかった理由はいくつか考えられるが、研究との両立が難しく、授業外での予習復習に時間が取れなかったことや、仲が良すぎてクラスメイトとは英語で会話していたことが大きい。学生からは、授業のスピードが速いという意見があった。授業内の雰囲気はよく、皆まじめに課題に取り組んでいたが、総合的な日本語力がつかなかった点を、教える側としてどう対処し改善していくかを考えなければならない。

〔一般 A 2 クラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
2	一般 A 2 〔松尾〕	一般 A 2 〔中村〕	一般 A 2 〔廣瀬〕	一般 A 2 〔河田〕	

授業報告（A 2 クラス担任：松尾）

一般 A 2 クラスは初級レベルのクラスで、受講者は 10 名（修士課程 7 名、博士課程 1 名、研究生 2 名）で、国籍はインドネシア（3）、中国（2）、ミャンマー（2）、エジプト、台湾、東ティモールであった。うち 5 名は以前生活日本語クラスを、2 名は総合 A クラスを受講した学生であった。一般クラスは、専門の授業などで多くの学習時間が取れない学生が多いため、一般クラスの教科書として活用形のルールが繰り返し何度も出てくる『まると初級 1 A 2 りかい』（国際交流基金編著）を使用した。今学期も前学期同様に週 4 コマで実施した。

今学期は当初 8 名で開始したが、学期の早い時期に、生活日本語クラスの学生から A 2 クラスで勉強したいとの申し出があり、2 名が新たに加わった。両名とも日本語学習歴が 1 ヶ月未満だったため、不安もあったが、学習意欲が非常に高く、最後まで熱心に取り組んでいた。結果、漢字圏の学生ということもあってか、学期終了時には他の学生と同等

かそれ以上の日本語力を身につけていた。2名以外にも今学期は学習意欲が高い学生が多く、出席率や課題（任意）の提出率も高かった。

今学期は総合Aクラスを受講していた学生が2名いたため、生活日本語クラスを受講していた学生とのレベル差が心配であったが、全体的に語彙や文法の基礎ができていたため、学習項目の導入等は円滑に進めることができ、運用につながる練習を十分に行うことができた。どの学生も得手不得手があるものの、そこを学習者同士で助け合いながら学習を進めていた。学期の後半は専門の授業との関係で欠席が増えた学生もいたが、全体的に熱心に学習に取り組み、日本語能力を向上させていた。

今学期は次学期以降にBクラスで勉強したいという学生が多かった。学期によって数に違いはあるものの、このような継続的な学習を望む学生は近年、一定数存在している。今後はA2クラスとBクラスの接続も視野に入れながら、授業内容の見直しを図っていきたいと思う。

【集中・一般Bクラス】

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [小寺]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [松尾]	総合日本語B [秋山]	総合日本語B [河田]
2	漢字・語彙B [野原]	口頭表現BC [橋本]	文章表現B [松尾]	口頭表現B [野原]	聴解表現B [石井]

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは集中コース3名（博士課程1名（インドネシア）、研究生1名（中国）、日本社会文化プログラム学生1名（フランス））、一般コース6名（修士課程2名（インドネシア、ベナン）、博士課程1名（中国）、研究生1名（中国）、教員研修生1名（インド）、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）1名（フランス））が受講した。全員来日していたので、今学期はオンラインでの授業は行わず、対面のみで授業を行うことにした。

本来であれば集中コース受講者は全10コマ必修、一般コース受講者は5コマから選択という受講の仕方であったが、今期は集中コース受講者が少なく、またコロナ禍という状況を考慮し、一般コースの学生は10コマから選択で受講できることにした。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで学んだ初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。今期の総合Bクラスは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、

その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。

今期のBクラスは、コロナ禍の中、積極的に授業に参加していた。通常であれば一般コース受講者は受講コマは5コマが上限であったが、今期はそれ以上の授業を受講することができ、実際5コマ以上を受講した学生は2名いた。学生たちは真面目に受講してくれた。

〔集中・一般Cクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	日本語演習C 〔吉成〕	総合日本語C 〔吉成〕	総合日本語C 〔小寺〕	総合日本語C 〔野原〕	
2	漢字・文法C 〔小寺〕	口頭表現BC 〔橋本〕	文章表現C 〔吉成〕		総合日本語C 〔秋山〕
3	口頭表現C 〔石井〕			文章理解C 〔秋山〕	

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルであるCクラスを受講したのは、集中コース4名（教員研究生2名（タイ、カンボジア）、研究生1名（中国）、日本社会文化プログラム学生1名（スペイン））、一般コース7名（博士課程3名（インドネシア3）、研究生4名（中国4））である。全員が渡日済みであったため、すべて対面で授業が行われた。集中コースの4名は授業内では全員が真面目に取り組んでいたが、授業外での自学学習にどれほど時間をかけて取り組んだかでレベル差が出てきた。一般コースの受講者で、何度もCクラスを受講している人は来なくなり、大学院入試を控えた研究生は準備で忙しいと途中で来なくなる人もいた。一般コースにもすべての科目を開講しているが、学期末まできちんと受講することができない学生ばかりでは、開講科目を増やしてもあまり意味がない。毎学期の課題であるが、一般コースの学生には、受講するなら最後まで続ける意志をしっかりと持たせ、授業運営を行ってきたい。

〔一般Dクラス〕

時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D 〔野原〕	総合日本語D 〔土谷〕	聴解演習D 〔廣瀬〕	総合日本語D 〔秋山〕	総合日本語D 〔石井〕
2			文章理解D 〔土谷〕		口頭表現D 〔田辺〕

Dクラスには日本語・日本文化研修コースの学生（以下日研生）が含まれるが、日研生は上記以外に日研生専用科目を受講する。詳細は第2章（日本語・日本文化研修コース）を参照のこと。

授業報告（Dクラス担任：土谷）

今期のDクラス受講者は、9名（日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）5名、学内公募の研究生1名、同修士課程1名、大学間協定校からの交換留学生2名）で、国籍はタイ、中国（6）、ベトナム、ベルギーであった。日研生1名の来日が1週間遅れたが、それ以外の全員が学期当初から教室に揃うという、久しぶりの通常モードの授業を行うことができた。ただし、学期途中で数名が新型コロナ陽性となったため、陽性者・濃厚接触者がいる間はハイブリッドで授業を行った。提供授業は、総合D（週4コマ）、口頭表現D（週1コマ）、聴解演習D（同）、文章理解D（同）で、日研生には加えて文章表現D（同）も提供した。

今期について特記すべきは、日研生5名のためむことなく着実に学ぶ姿勢である。日研生は毎年度勉学意欲が高いが、今期については中だるみもエネルギー切れも全くなく、一貫した姿勢を保てたという点では随一ではないかと思う。発言が活発な学生と自発的な発言が得意ではない学生の差は見られたが、お互いに手を抜かない姿勢を見せあうことで、結果としてクラス全体の雰囲気とレベルを高めることができた。同年度春学期と真逆の様相である。日研生以外の学生の中には、学期途中から明らかに低調になる者が発生したが、それでも日研生に引っ張られて脱落せずに留まったと言えよう。

新型コロナウイルス前は、Dクラス学生の数が増加したため、文章理解Dと口頭表現Dは、日研生用とそれ以外の学生用の授業を別に準備した。しかし、最近の傾向としてそれほど人数を見込めないため、次年度についてはこれらの授業の別建てはしないこととした。

1.2.2 生活日本語コース

10月17日（月） 授業開始 12月24日（土）～1月5日（木） 冬季休暇
 2月9日（木） 授業終了

生活日本語コース（JDL：Japanese for Daily Life）は、ゼロ初級（未習者）を対象としたクラスのみ提供している。

[JDLクラス]

時間割

	月	火	水	木	金
1	生活日本語 [石井]		生活日本語 [橋本]	生活日本語 [河田]	生活日本語 [秋山]

授業報告（JDLクラス担任：橋本）

生活日本語（JDL：Japanese for Daily Life）クラスは日本語未習者対象のクラスで、受講者は23名（修士課程4名、博士課程14名（うち国費1）、研究生1名、協定校からの交換留学生（特別研究学生）4名）であった。国籍は、インド（7）、インドネシア（3）、ガーナ（2）、ベトナム（2）、バングラデシュ（2）、中国（2）、ケニア、コートジボワール、タイ、パキスタン、ラオスであった。来日が遅れた学生はいたが来日日程がはっきりしていたので、今学期はオンラインでの授業は行わず、対面のみで授業を行うことにした。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、JDLでは機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を組んでいる。このクラスは口頭表現中心に授業を進めるので、文字学習は必ずしも必要ではなく、また文字学習を負担と感じる学生もいると考え、教材にローマ字を併記している『まるごとA1りかい』を教科書として使用しているが、以前から文字学習への要望が多数あり、文字学習も行なっている。専門の研究があるため欠席が多かったり途中で受講をやめてしまう学生もいたが、出席した学生は真面目に課題に取り組んでいた。

2. 日本語・日本文化研修コース

2.1 第21期（2021年10月～2022年8月）概要

第21期生は、大学推薦の国費留学生3名（カセサート大学（タイ）、電子科技大学（中国）、フエ大学（ベトナム））であった。

第21期 履修／修了生（姓アルファベット順）

チャーターウェーティ ラミター（Chatawetee, Ramita）	タイ カセサート大学
郭雨杭（カク・ウコウ、Guo, Yuhang）	中国 電子科技大学
グエン フー タイ サン（Nguyen, Huu Thai San）	ベトナム フエ大学

第21期生も20期生と同様、新型コロナウイルスに大いに翻弄された。1名は12月に来日できたものの、他2名は突然のオミクロン株騒動により急遽来日予定が白紙になり、結局来日できたのは3月であった。つまり、秋学期は全てオンラインでの受講となったわけである。来日できると思ったらそれが裏切られるという失望を繰り返した学生たちの精神状態が心配であったが、来日後の3名は、限られた時間を有益に最大に楽しく過ごそうと非常に積極的であった。授業参加も論文作成も、今までの日研生に全く劣るものではなかった。秋学期に中止した郡上市への訪問を春学期実施に再アレンジし、同地に複数回訪問できたこと、対面の能楽ワークショップができたこと、通常秋学期に開講する「地域実見」を春学期に提供したことが、日本滞在が半分の期間になってしまった学生へのせめてもの埋め合わせになっていてほしい。

本コースの詳細については、以下のサイトを参照願いたい。

<http://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jlcourse/>

2.2 論文作成と発表会

本学の日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視していることにある。第21期生は、日本で過ごせる期間が半年になってしまったなか、それぞれの興味関心に沿ったテーマで研究を行い、論文を完成させ、堂々とした口頭発表を行った。

論文提出後に実施する口頭発表会は、ハイブリッドで実施した。新型コロナウイルスによる数少ないメリットのひとつは、オンラインの活用が進んだことである。過去2年の本発表会をオンラインまたはハイブリッドで行ったという経験が、今回に生きた。酷暑の折、会場に来なくとも、また日本にいなくとも参加できるオンライン形式は、このような発表

会には適していると実感した。

本発表会については、本学公式サイトにも掲載されている。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2022/08/entry12-11784.html>

論文テーマと指導教員

チャーターウェーティ ラミター

「『口』にまつわることわざ ―日本とタイのことわざの比較から見えてきたこと―」

(指導教員：土谷桃子)

郭雨杭

「岐阜地域のモーニングに関する一考察」

(指導教員：森田晃一)

グエン フー タイ サン

「カラオケと人間関係 ―だれと行くか、ひとりで行くか―」

(指導教員：土谷桃子)

2.3 履修科目

履修科目は以下の通りである（この他に選択科目もある）。

授業科目	秋期	春期	合計
総合日本語	5 (5)	—	5 (5)
全学共通教育科目等	—	3 (6)	3 (6)
日本語読解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語文章表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語口頭表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語聴解演習	1 (2)	—	1 (2)
現代日本の社会	1 (2)	—	1 (2)
日本事情CⅡ	1 (2)	—	1 (2)
日本文学概論	1 (2)	—	1 (2)
地域実見	—	1 (2)	1 (2)
日本の文化芸術	—	1 (2)	1 (2)
論文指導	—	1 (1)	1 (1)
修了論文	—	(4)	(4)
合計	12 (19)	9 (21)	21 (40)

表中の数値は、授業数（単位数）を表す（1授業は90分）。

3. 日本社会文化プログラム

3.1 受講概要

日本社会文化プログラムは、学術交流協定を結んでいる大学とからの交換留学生のうち、日本語、あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を留学生センターで受入れ、総合的な日本語・日本文化教育を行なうために開講したプログラムである。2007年度に開講し、2022年度は第28期となる。本プログラムは4つのコースを設けており（異文化理解コース1、異文化理解コース2、日本文化入門コース、日本社会文化コース）、各学生のレベルに合わせてコースを設定している。

3.1.1 第28期（2021年度後期～2022年度前期）

2018年度後期に第28期の3名を迎えた。留学期間は1年間である。

コロナ禍のため、2021年10月からの半年間は日本に入国できず、オンラインでの受講となった。うち2名は2022年4月以降に来日することができ、所定の単位を取得し、修了した。1名は2022年4月以降も来日ができなかったため、1コースのみの修了となってしまい残念であった。

ドゥーセ アクセル ルイ	フランス	リール大学	異文化理解コース1、 異文化理解コース2修了
シャンドリエ アリゼア	フランス	リール大学	異文化理解コース2、 日本文化入門コース修了
チン カキツ	中国	吉林大学	日本社会文化コース修了

3.1.2 第29期（2022年度後期）

2022年度後期に第29期の2名を迎えた。うち1名は留学期間は半年間、1名は1年間である。

留学期間半年間の1名は日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得し、修了した。

サンチェス サグラド ルーカス	スペイン	サマランカ大学	日本文化入門コース修了
-----------------	------	---------	-------------

3.2 社会文化プログラム専用品目

このプログラムでは、日本文化を実践的に学ぶ機会を提供するため、「日本文化へのいざない」という科目を設けている。2022年度前期の「日本文化へのいざない」は、本学客員教授で、江戸千家宗家蓮華菴家元である川上閑雪宗匠に茶道に関する講義をお願いした。

茶道に関する講義と共に、実際に茶道を体験する機会があり、日本文化理解の入門として、受講生には大変得るものがあった。

4. 全学共通教育

4.1 概要

日本語・日本文化教育センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

4.2 2022年度 前学期

科目	授業名	時間	担当	備考
日本語および日本事情科目	日本語DⅠ—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情CⅠ	火2	橋本	
	日本事情AⅠ	火4	森田	
人文学科目	言語学入門—日本語学入門—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本語表現論—日本語口頭表現—	火2	橋本	日本語研修コース集中・一般B・Cクラスも受講

4.3 2022年度 後学期

科目	授業名	時間	担当	備考
日本語および日本事情科目	日本語DⅡ—文章表現—	月3	土谷	
	日本事情CⅡ	水2	森田	日本語・日本文化研修生も受講
人文科学科目	言語学入門—日本語学入門—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本文学—近世文学の世界—	月2	土谷	
	日本語表現論—日本語口頭表現—	火2	橋本	日本語研修コース集中・一般B・Cクラスも受講
	日本近世史—近世文化史—	火2	森田	
	異文化論—通過儀礼（人の一生）に見る世界の諸地域—	水2	森田	

5. 年間行事

日本語・日本文化教育センターでは年間を通じ、様々な行事を行なってきた。2022年度（2022年4月～2023年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事（下線）内容について報告する。なお、本年度も新型コロナウイルス感染症における岐阜大学の活動指針に沿って、いくつかの行事を中止することとなった。

2022年

4月

日本語研修コース授業開始（4月18日）

7月

郡上市連携事業 ① 郡上市立相生小学校訪問（7月1日）

能楽（能・狂言）ワークショップ（7月27日）

日本語研修コース授業終了（7月29日）

8月

日本語・日本文化研修留学生論文発表会（8月7日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム修了式（8月25日）

10月

日本語研修コース授業開始（10月11日）

12月

雅楽カルチャー体験コンサート（日本文化ワークショップ）（12月14日）

2023年

1月

郡上市連携事業 ② 観光立市郡上異文化コミュニケーション研修（1月17日、21日）

2月

日本語研修コース授業終了（2月3日）

5.1 能楽（能・狂言）ワークショップ

2022年度は、新型コロナウイルスの様相が前年度と比較して落ち着いたことから、人数を限っての対面参加とオンラインでの参加を両立するハイブリッド形式で行った。参加しやすいオンラインのメリットは重々承知しつつ、やはり場と空気を共有することの楽しさと臨場感は何にも代えがたいものであった。次年度こそは、春学期のもうひとつの日本語

化ワークショップである「郡上踊りワークショップ」も、復活させたいものである。

実施日：2022年7月27日（水）13：30～15：30

実施形態：対面（日文センター和室）・オンライン（Zoom使用）併用

講師：観世流シテ方味方團先生、田茂井廣道先生（以上能の講師）、大蔵流狂言方茂山忠三郎先生、小斉平真路先生（以上狂言の講師）

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2022/08/entry04-11769.html>

「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）オンラインワークショップ」を開催しました

本学グローバル推進機構 日本語・日本文化教育センター（以下、「日文センター」という）は、7月27日（水）に「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ」を開催しました。



「ワークショップ」を開催しました。日文センターでは、2005年度からプロの能楽師をお迎えして能楽（能・狂言）ワークショップを行っています。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、一昨年度は録画で、昨年度はオンラインで実施しましたが、今年度は対面とオンラインを併用した形式で開催しました。対面・オンライン併せて約40名の参加がありました。

講師として観世流シテ方の味方團先生 および 田茂井廣道先生（以上能の講師）、大蔵流狂言方の茂山忠三郎先生 および小斉平真路先生（以上狂言の講師）の計4名を、日文センター和室にお迎えしました。

仕舞「岩船」の実演を皮切りに、

能楽の歴史及び能と狂言の面おもてや所作の違いについての講義、能楽の音楽（楽器と謡）、狂言の泣き・笑いの感情表現、「寝音曲」の鑑賞、能装束の着付けといった盛りだくさんの内容が、テンポよく次々と展開されました。対面参加者とオンライン参加者の双方が楽しめるようにとの講師の先生方の工夫が随所に見られ、対面の臨場感とオンラインの利便性をどう生かしていけばよいかを考える機会ともなり、コロナ後を見据えた新しい形のワークショップとなりました。困難な状況の中、日文センターの歴史ある行事にお力注いでくださる講師の先生方に心からお礼申し上げます。

今後も、グローバル推進機構では、本物の日本文化に触れる機会を提供する活動を展開していきます。

5.2 雅楽カルチャー体験コンサート

新型コロナウイルス発生前は、秋学期の日本文化ワークショップとして「十二単の着装と体験」を行っていた。2022年度秋は状況が少し落ち着いたため、人数制限をして同ワークショップができないか学外講師に打診したが、まだ難しいという返答があり、開催を断念した。よって秋学期はワークショップを開催しない方向で考えていた。

しかし、12月に来学するウィンタースクール（インド工科大学グワハティ校とマレーシア国民大学の学生対象の2週間プログラム）の学生に対する日本文化体験の一環として必要という要望があり、他の内容を模索することとなった。学内での実施が可能なものを検討した結果、愛知県豊橋市のオフィス菊理に雅楽ワークショップを依頼することとした。

初めての試みであり、順調に開催できるか不安はあったが、講師の行き届いた準備により、非常に楽しく有意義な会となった。次年度以降の可能性も大いに感じている。

実施日：2022年12月14日（水）14：00～16：00

実施形態：対面（日文センター和室）

講師：近藤泰史先生、同智佳子先生（オフィス菊理）

以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2022/12/entry26-12070.html>

「雅楽カルチャー体験コンサート（日本文化ワークショップ）」を開催しました

本学グローバル推進機構 日本語・日本文化教育センター（以下、「日文センター」という）は、12月14日（水）に「雅楽カルチャー体験コンサート（日本文化ワークショップ）」を開催しました。コロナ禍で開催が難しかった対面での日本文化ワークショップを、よう



やく再開することができました。今年度は初めて雅楽を取り上げました。ウィンタースクール参加学生や日文センターの日本語・日本文化研修留学生等、約30名の参加者が日本の美しい伝統文化を楽しみました。講師には、雅楽の普及活動をしている近藤泰史先生、同智佳子先生をお迎えしました。

ワークショップ前半は、雅楽コンサートとその歴史を学ぶ講義が行われました。雅楽は日本に流入したさまざまな文化の融合の結果であることや、雅楽楽器が姿を変えて現代の楽器になっていることをクイズ形式で学び、有意義な時間を過ごしました。

後半は体験パートで、楽器に触れてみたり、狩衣や袴等の平安時

代の衣装を身にまといました。学生たちは写真撮影の手が止まらない様子でした。多くの衣装と展示品をお持ちくださり、楽しく温かなワークショップをしてくださった講師の先生方に心よりお礼申し上げます。

今後も、グローバル推進機構では、本物の日本文化に触れる機会を提供する活動を展開していきます。

5.3 郡上市連携事業

岐阜県郡上市とは、1996年度より岐阜大学サマースクールのホームステイプログラムを提供いただいたり、2012年度から開催の郡上踊りワークショップで講師をお招きしたりするなど、非常に深く強い関係を有している。コロナ禍でやむなく中断している事業もあるが、状況が好転しつつある2022年度には、①郡上市立相生小学校訪問、②郡上市職員特別研修（観光立市郡上異文化コミュニケーション研修、事前研修および現地研修）を行うことができた。両活動には、本センター所属の日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）は参加必須、日本社会文化プログラム履修生（以下社会文化生）は希望参加、さらに②の

現地研修には、交換留学生数名も参加した。以下にそれぞれの活動について報告する。

①郡上市立相生小学校訪問（2022年7月1日（金））

郡上市立相生小学校児童との交流は、2021年度のオンラインサマースクールにおける交流体験に続き、2回目であった。実は、2022年度のサマースクールもオンラインで予定されており、同校とのオンライン交流会も予定されていたのだが、参加希望者が集まらなかったため、サマースクールそのものが非開講となった。しかし、相生小学校ではすでに交流会の準備を始めていたため、せっかくの機会なので本センターの日研生3名及び社会文化生1名が同校にお邪魔し、対面で交流会を行うこととした。社会文化生は前年10月から留学開始だったが、コロナ禍で来日できず、5月によりやく岐阜にたどり着いた学生である。留学終了が8月であったため、わずか3ヶ月弱のリアル留学となってしまった。せめてこの郡上での体験が楽しい思い出のひとつとなっていてほしい。

当日は、午前に相生小学校を訪問し、5・6年生との交流機会を持った。5年生は相生小学校の紹介、6年生は郡上市の特徴ある文化や名産品などの紹介をした。続いて参加留学生4名が、「私の国の小学校／小学生」「私が小学生だったとき」のテーマで発表をし、小学生からの質問を受け付けた。小学生たちの写真や原稿をしっかりと準備した発表に留学生は感嘆した様子だった。留学生の発表に対しては小学生たちから途切れることない活発な質問があり、大変楽しく賑やかな会となった。全員がマスクを着用したままであったが、その下の笑顔があふれ出る会であった。

午後は、郡上八幡国際友好協会（GIFA）が郡上文化体験をアレンジしてくださった。留学生は郡上八幡城を訪問し、浴衣を着用



しての郡上踊り講習会に参加した。40℃に届こうかという非常に暑い日ではあったが、留学生たちは心から楽しみ、岐阜そして郡上の大いなるファンになった1日であった。

午前の交流会、午後の文化体験とも、郡上八幡国際友好協会（GIFA）に事前・当日とも大変お世話になった。このような地域からのお力添えをいただける大学であり留学生であることを、改めて有難く思い、感謝申し上げる。

②郡上市職員研修（観光立市郡上異文化コミュニケーション研修）（2023年1月17日（火）事前研修、1月21日（土）現地研修）

郡上市と本センター（主として日研生）との連携は、さまざまな場面で展開されているが、2018年度からは同市人事課が実施する郡上市職員特別研修（観光立市郡上異文化コミュニケーション研修）に参画している。2019年度に「郡上市職員と留学生の顔合せを兼ねた事前研修（岐阜大学にて）＋留学生が郡上を訪問する現地研修（郡上市にて）」という形式を確立した後コロナ禍となってしまう、2020・2021年度は事前研修の部分のみをオンラインで行うことしかできなかった。2022年度はようやく通常の形に戻すことができた。当初は11月に両研修を行う予定だったが、コロナ陽性者と濃厚接触者の発生により、日程を再調整し、1月実施に漕ぎつけた。

事前研修（1月17日）は、午前に郡上市職員と留学生の顔合せと市職員による郡上市の



紹介、午後に市職員に対する日文センター教員による特別講義を行った。午前の参加留学生は日研生5名で、市職員が郡上市の英語紹介で奮闘する姿勢には、感銘を受けていた。午後の講義は土谷が担当し、郡上市と本センターの交流の歴史や、留学生や日本語学習者と交流する上での注意点を自身の失敗談を交えて話した。





現地研修（1月21日）は、事前研修ですでに顔見知りとなっている市職員と町内を散策し、郡上の文化を体感した。事前研修に参加した日研生5名に加え、社会文化生2名、交換留学生2名が参加した。郡上八幡博覧館にて郡上八幡の歴史を学び、郡上踊りの手ほどきを受けたのち、グループに分かれて市内を散策した。残念ながら郡上八幡城が耐震工事中で入れなかったが、活動の感想として美しい景色と絶え間なく聞こえる水の音を挙げた留学生がいたように、郡上八幡を十分満喫できたと言えよう。留学生が楽しただけでなく、市職員にとっても有意義であったことを祈りたい。

一点付記する。前年度（2021年度）の本事業は、2021年12月のオンラインでの事前研修しかできず心残りであった。同研修に参加した留学生4名（日研生3名・社会文化生1名）が2022年5月に岐大にそろったことから、正式な事業としてではなく彼らの日本文化体験の一環として6月18日（土）に郡上市を訪問した。午前には郡上八幡の古い街並み散策や食品サンプル見学、午後は郡上白鳥の阿弥陀ヶ滝にて昼食と見学、その後足湯という盛りだくさんで楽しい訪問であった。前年度の事業にもかかわらず、郡上市人事課およびコーディネートの杉インターフェイスにはこの訪問につきご尽力いただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

6. 交流ラウンジ

2012年4月、旧留学生センターに「交流ラウンジ」が設置されてから、ちょうど10年になる。2017年4月のセンター移転（共通教育棟4階）に伴い、交流ラウンジの場所も変更となった。そして2018年4月に「日本語・日本文化教育センター（略称：日文センター）」とセンターの名称変更があったが、交流ラウンジの場所やここでの活動内容は変更なく続けている。しかし、2020,2021年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、ラウンジの使用を制限し、チューター活動やイベントも行わなかった。2022年度後期（10月）から、ラウンジ活動を再開することができた。その間の活動や利用状況などを報告する。

6.1 ラウンジチューター活動

交流ラウンジは多目的に活用されているが、中心となるのはラウンジチューター活動である。学期中の平日（金曜日を除く）午後2時45分から4時45分の2時間、1～2名の日本人学生がチューターとして常駐し、ラウンジにやってくる留学生と日本語で交流する場を提供している。活動時間内にやってくる留学生の目的は様々だが、日本語クラスの宿題チェックやレポートの添削など、日本語学習に関わる活動を目的とする学生が多い。

今年度は後期からラウンジチューター活動を実施した。月曜日から木曜日に一人ずつチューターが配置された。来訪者が重なり、順番を待ってもらう日もあれば、一人も来ない日もあり、来訪者数が読めない難しさがあった。チューターには日誌を書いてもらっているが、来訪する留学生のレベルや相談内容も様々であるようだ。学期末には、チューター活動の感想や、よりよい活動にするための意見など、まとめの報告を提出してもらった。これを反映し、来学期の活発な活動につなげたい。

6.2 ラウンジチューター企画イベント

例年、年に二回、ラウンジチューター主催による留学生向けのイベントを開催してきた。夏は「七夕まつり」、冬は「日本のお正月」である。しかし、今年度は自粛すべきと考え、ラウンジチューター活動は再開したものの、イベントは行わなかった。来年度は実施できることを願うばかりである。

6.3 ラウンジの利用者数

ラウンジがどのくらい利用されているのかを把握するため、開設当初からのべ利用者数をまとめている（表1）。2016年度から、ラウンジチューターイベント（七夕まつり、お正月イベント）の参加者を除いた数としているため、この年度の利用者の数が減っている

が、徐々に利用者数が増えてきていたことがわかる。

残念ながら今年度は、後期だけのチューター活動実施であったことや、そもそも留学生数が少ないこと、距離を開けての利用促進などもあり、極端に利用者数が少ない。来年度はもう少し利用者が増え、ラウンジに活気が戻ればと思う。

表 1. ラウンジの利用状況（チューター配置時のみ。利用者数には日本人学生含む）

年度	前期配置期間と利用者数	後期配置期間と利用者数	合計
2022		11月7日～2月9日 80人	80人
2019	4月11日～7月31日 376人	10月10日～2月7日 324人	700人
2018	4月13日～7月30日 405人	10月9日～2月8日 320人	725人
2017	4月17日～7月26日 330人 (金曜日は閉室)	10月10日～2月7日 296人	626人
2016	4月18日～7月28日 209人 (金曜日は閉室)	10月11日～2月10日 348人	557人
2015	4月13日～7月31日 354人 (金曜日は閉室)	10月12日～2月4日 301人	655人
2014	4月14日～7月31日 543人	10月14日～2月10日 438人	981人
2013	4月15日～8月2日 420人	10月10日～2月7日 333人	753人
2012	5月28日～8月3日 310人	10月10日～2月8日 558人	868人

ラウンジは、ラウンジチューター活動以外にも、日本語研修コースのクラス発表、社会文化プログラムのオリエンテーション、学生との面談等、様々な用途で使用されている。また、日本人学生向けの海外留学や学術交流協定校に関する資料、留学経験者の報告書もあり、留学に関する情報収集をすることもできる。ラウンジの壁面には日本語・日本文化教育センターで行われた様々なイベントの写真や、日本語授業で行われた発表ポスターなども掲示している。

これからも、留学生そして日本人学生共に、誰もが気軽に利用できる場となるよう、環境づくりや広報活動に力をいれていきたい。

令和5年3月7日 現在

[illegible]

左は男性、右（網掛け）は女性

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2022

執 筆 者

土 谷 桃 子	岐阜大学 日本語・日本文化教育センター教授
松 尾 憲 暁	岐阜大学 日本語・日本文化教育センター助教
山 本 晋 也	周南公立大学 経済学部准教授
高 井 か お り	東亜大学 芸術学部教授

編 集 委 員

橋 本 慎 吾	日本語・日本文化教育センター長（編集委員長）
土 谷 桃 子	日本語・日本文化教育センター教授
吉 成 祐 子	日本語・日本文化教育センター教授
松 尾 憲 暁	日本語・日本文化教育センター助教

●編集後記

2022年度の後期から、ガイダンスも授業も対面のみで行えるようになった。また、ラウンジチューター活動も再開し、少しずつだが、よい変化が見えてきた。ただ、学生数はコロナ前と同様とはいかなかった。少人数の対面授業の良さを感じつつ、寂しくもあった。これを書いている2023年7月現在、マスクを外すこともでき、「はじめまして」という気持ちで顔を合わせる機会も多くなった。まだまだ予断は許さないが、様々な点で、コロナ前と同じ状況に、そしてコロナ前とはまた違う成長が見せられたらと思う。

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2022

2023年8月発行

岐阜市柳戸1番1

編集兼
発行者 岐阜大学 日本語・日本文化教育センター
責任者 橋 本 慎 吾

印刷所 西 濃 印 刷 株 式 会 社
岐阜市七軒町15番地

Bulletin of the Center for Japanese Language and Culture
Gifu University
2022

Preface : HASHIMOTO Shingo	1
1. Special Contribution	
in commemoration of the retirement of Professor MORITA Kōichi	
Reflections on Center for Japanese Language and Culture.....	3
2. Article	
TSUCHIYA Momoko	
Fact-based plays in Gifu	
: “A Murder case of <i>Matsuno</i> ” and “Bloodshed of five people in Ogaki”.....	7
MATSUO Noriaki, YAMAMOTO Shinya and TAKAI Kaori	
Trends in Research on “Careers” in the Field of Japanese Language Education	
: A Survey of the Literature from 2004 to 2022.....	23
3. Annual Report (2022.4-2023.3)	

Published by
Center for Japanese Language and Culture
Gifu University, Gifu 501-1193, Japan